

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

登場人物

未来人（みくひと） みつくん。約一年前からフェアリーランドで暮らしていて、現在図書館で働いている。新人類。19歳。A型。

有栖川 月影（ありすがわ つきかげ） つつきー。未来人の腹違いの兄。近々結婚することになっている。新人類。25歳。A型。

エフィール・エアリアス 月影の恋人で、普段は馬の姿をしているが、人型にもなれる。馬の妖精。2000歳以上。O型。

ミント・メリーリング サンドリヨン妖精学校時代の月影の同級生。白天使学校に通っていたが、休学中。花の妖精。約150歳。B型。

デスコル 未来人と月影の父親。新人類。44歳。A型。

ヘリオトロープ ヘリオ。デスコル、月影、未来人の住んでいる家の2階に住んでいる、オーナーさん。風の妖精。4000歳近く。O型。

レオニード・アリオーナフ レオ様。まぼろし山の玉宮に住む、事実上の王様。未来人の守護妖精。水の妖精。4400歳近く。A型。

トーマ・ブラックマン とーま君。レオニードの秘書。犬の妖精。3000歳近く。AB型。

姮娥 暮天（こうが ぼてん） 姮娥様。レオニードの母親代わりだったが、彼から並々ならぬ愛情を注がれる。玉宮在住。水の妖精。7300歳以上。A型。

アイレーン・エンフィールド アイレンちゃん。未来人の従兄弟のスターリングが分裂し、男女に分かれた後の女の方。未来人と共にフェアリーランドに来て、今は玉宮に住んでいる。花の妖精。21歳。A型。

バウス・ニコライブ 月影の守護妖精。1000歳近く。狼の妖精。O型。  
ローズマリー・バターリング ミントの親。花の妖精。500歳近く。O型。  
セーラ・マツキールリング ミントの親。花の妖精。500歳近く。B型。

六連 昴（むつら ぼう） スバルくん。姮娥の息子で、デスコルの守護妖精。水の妖精。1000歳以上。B型。

ニコル・レンフェルト アイレーンの母親で、フェイイルベルクが男女に変身した後の女の方。花の妖精。2000歳以上。A型。

フレッド ニコルの夫で、アイレーンの父親。デスコルの弟。新人類。39歳。A型。

フロール・シャンフォード ニコルの義兄。花の妖精。3000歳近く。A型。

有栖川 ミルナ デスコルの妻。月影の母親。旧人類。故人。A型。

カロン・プラネード 未来人の母親。旧人類。故人。O型。

コムギ 『カップルで行く、ラブラブ10日間の旅』のガイド。愛の妖精。1000歳くらい。O型。

## 第1節 全ては愛のために

あたしは昔からとろくて、物覚えが悪く、ワガママで、ぶりっ子で、泣き虫で、クラスの子にはよくいじめられていた。何年も学校に通わない時期があり、毎日家で大きなクマのぬいぐるみを相手に、一人で遊んでいた。

ある日、久しぶりに学校へ行くと、あたしの隣の席に翅のない子が座っていた。彼は先日この学校に入学した人間の子供で、まだ5歳だった。私は彼を『つきー』と呼んだ。初めて自分より下の生徒が現れたことに、喜びさえ感じた。それから私は毎日学校へ通う事になり、放課後は一緒に居残り学習をした。

彼といる間には誰にもいじめられなかった。彼があたしを守ってくれているのだと勘違いしていたが、彼がやってきた日、先生が「人間というものは、すぐに死んでしまうので、いたずらしないように。」と注意していたからであった。皆が人間の子供にどう接したらいいか戸惑う中、あたしだけが彼と話すことができた。

しかし、7歳の時にはすでに彼には大勢の友達がいた。あたしはいじめられることはなくなったが、彼との距離感が遠くて、驚きを隠さずにはいられなかった。

そして10歳の時だった。彼に呼び出されたあたしは、彼に父親が現れたことを知った。彼の家族は母親と、そして現在住んでいる家のオーナーと、そして飼育している馬だけだった。彼は好んで馬に乗り、学校にも馬で通っていた。あたしも何度か馬にのせてもらったが、その馬が妖精であることは、秘密だった。彼は父親の話をせず、聞いても答えてくれなかったが、彼の父親が生きているとは知らなかった。彼は父親が急に現れ、どう接したらいいか分からなかったらしい。

あたしは彼に「大人になったら、結婚しよう。」とある日告白した。彼は「うれしいけど今それを決めるのは早すぎるから、もう少し待ってて。」と言った。あたしはそれを良い方と考えた。

13歳の時、彼の母親が亡くなった。死因は皆で食事中にテレビを見ていた時に、ニュースに六連が出てきて、どんなニュースかは忘れたが、それを見た母親がお餅を喉に詰まらせて、死んでしまったらしい。あたしはそれを聞いて笑った。お餅を喉につまらせて死ぬというのは、昔話のおじいさんおばさんだけだと思っていたからだ。だが、つきーはそんな私を見て、大声で泣き叫んで、走り去ってしまった。その時は、親と一緒に彼の家に謝りに行って、なんとか許してもらった。

それから母親が忘れられない彼に、「父親とオーナーさんを結婚させればいいんじゃないの？」と提案したところ、彼に怒られ、一週間口を聞いてもらえなかった。その時も何とか、彼の機嫌をとる事に成功したが、その代わり処女を失った。でもそれで彼の機嫌が直るならいいと思っていた。しかし、驚いたことに、彼のあそこにはしっかりと毛が生えていた。陰毛というらしい。驚きを隠せなかったあたしはその場で逃げ回ったが、彼がごく嫌そうにこつちを見ていたので、嫌われたくない一心で股を開いた。

「お願い、やさしくして。」

だが、彼は随分と乱暴だった。あたしは痛くて泣き叫んだ。すると、今まであたしがいくら泣いても何も言わなかった彼が、こう言った。

「うるせーな！お前のその泣き声を聞いていると、イライラするんだよ。」  
「がくくくん。」

あたしは裸のまま、捨てられた。そして、彼のおちんちんが入ったおまんこは、何故かかゆく、翌日学校で彼に問い詰めて、喧嘩になった。その様子を見ていたクラスの子にトイレで囲まれ、彼には陰毛があったことなどを話した。そして、瞬く間にクラスメイト全員が彼の噂を耳にした。そして、処女ではない女子のうち、何人かは彼と寝たことを知った。あたしは彼を取られたくないと思い、嫌がる彼の手を引いて、彼を病院へ連れて行った。彼は絶対にペニスに何か病気を持っている。間違いない！彼はひどく嫌がりながらも、診察を受けた。結果は異常なしだった。え？あの時私のおまんこを襲ったあのかゆみは何だったの？でも彼が病気じゃなくてよかった。そう思い、彼を見ると、彼は震えながらこう言った。

**「お前なんか、大っ嫌いだく〜！〜！」**

あたしはしばらく立ち直れなかった。翌日、彼は何ともなかったかのようにクラスの皆と仲良くしゃべっていた。しかし、あたしに対しては冷たく、まるであたしがこの場にいらないかのようにふるまっていた。

あたしは彼がもう一度振り向いてくれることを信じて、努力した。彼の靴箱に毎日手紙を入れ、その中に朝親からもらったその日のおこずかいを入れた。しかし、後で彼に少しだがお金を返された。オーナーさんに怒られたらしい。それから、彼に電話をするようになった。しかも一日に何度も。多い日で、一日に200回もベルを鳴らしたことがあった。父親がよく出ていたが、彼が出ることはまずなかった。そして、ある日、彼は電話番号を変更した。私はしばらくショックから立ち直れなかったが、すぐに彼の家に向かい、彼の家の馬小屋に火をつけた。幸い、大事故にはならず、あたしは責任をとらなくていいことになった。馬は無傷だったが、妖精であることがばれた。人間の姿に変身した馬は、彼を誘惑し、そのまま合体してしまった。それから馬は馬小屋で暮らすのをやめ、つつきーの家族と共に暮らすようになった。

つつきーは15歳の時、あたしを残して卒業してしまった。そしてそのまま働き始めた。あたしはしばらく学校に残ったが、やっと卒業して、白天使学校に進学した。白天使にしろうと思ったのは『ホワイト・エンジェル☆なるみちゃん』というアニメに影響されたからだ。白天使を目指す妖精が、人間界で病気の男の子を救う話で、その男の子の声を出していたのがつつきーだった。彼は母親に言われるがままにオーディションを受けて、見事合格したらしい。月影の母親の名前はミルナで、主人公のなるみちゃんの名前を逆から読むとミルナになるのは偶然ではないらしい。なるみちゃんのアニメは『ホワイト・エンジェル☆なるみちゃんリターンズ』、『ホワイト・エンジェル☆なるみちゃんロマンス』、『ホ

ワイト・エンジェル☆なるみちゃんファイナル』と5年ほど続いて、つつきーは他のアニメにも出演していたが、残念ながらも声優の仕事はしていない。卒業後はアナウンス関連の事務所に就職し、半年間の研修の後ガイド試験に合格して今の仕事をしている。できればテレビでニュースを読み上げる彼が見たかったが、人間はすぐに年をとるという理由で断られたらしい。

こうして彼とあたしはまったく別々の道を歩み出した。それでも元同級生がつつきーと遊ぶ話をしていたりすると、無理矢理付いて行った。だが彼は明らかにあたしを避けていた。めげずに彼の家にも遊びに行つたが、怖いお姉さんに追い出された。そのお姉さんがあの馬だった。行く度に爪弾きにあった。あたしは彼女がつつきーといちゃいちゃしているのを見て、悔しくてたまらなかつた。

その時あたしに名案が浮かんだ。それはつつきーの守護妖精に会い、もう一度彼があたしを愛してくれるように頼むということだった。つつきーの守護妖精は、狼で、銀行の夜間専門の警備員だった。あたしは彼につつきーのことを話し、何とか『イエス』と言わせた。その代わり写真館でなるみちゃんの服を着せられて、写真を撮らされ写真集にしてもらい、彼にプレゼントすることになった。変な趣味のある、あまり女にもてない、カッコ悪い男に見えた。

彼の守護妖精バウスは、馬とつつきーについて話し合っているうちに、喧嘩になり、マラソンで勝負をつけることになった。そして、敗者は、勝者の言いなりになるということになった。そしてマラソンは、つつきーの留守中に行われた。結果は馬の勝ちだった。バウスは、つつきーが馬と結婚することになったら、馬に守護妖精の権利を譲ると約束して、去って行った。

あれから何年たったか忘れたが、白天使学校も休学してウエイトレスの仕事始めたあたしは、久しぶりにつつきーに会った。彼は酔っぱらっていて、あたしを見ても逃げなかった。あたしは嬉しくて、彼とホテルに行き、ベッドで寝かせた。正気に戻った彼は大分混乱していたが、「添い寝しただけだよ。」と言うと、なぜか礼を言われた。そして、フェアリーランドのフリーパス券を2枚買ってくれた。彼は「誰かと一緒に行ってくれ。」と言いたかったらしいが、あたしがどうしても「つつきーと一緒にがいい。」とだだをこねたので、彼はいやいや承知してくれた。

彼はあたしのことをウザイ女とは思っていないかもしれないけれど、あたしには彼しかいない。「月」という字を見ると、いつもドキドキした。「月影」という言葉を辞書で引き、ピンク色の蛍光ペンで印をつけた。彼はあたしの全てで、彼以外とは結婚するつもりはなかつた。

## 第2節 ぼくんち

フェアリーランドに来て、約一年が経ち、19歳になった。最初はここに来るのが嫌でたまらなかつたが、デスクも月影も普通だったし、優しくしてくれている。「人の心が読

めなくてよかった。」なんて言ったら罰が当たるかもしれないが、スターリングの家族の中に入っていた時よりも大幅に環境が変わってしまったて、戸惑いを覚えずにはいられない。ヴルーベリ男子学院中学部卒業後は、同学院の図書館で働いていたので、フェアリーランドでも図書館で働くことになり、わざわざまぼろし山の一番大きな中央図書館で働かせてもらうことになった。が、僕の仕事は返却された本を元にあつた場所に返すことだけだった。何でも図書館で働く者は、長年勤めていなければならず、図書館のなかにある本のことは何でも知っていなければいけない。そして古い本は大切に保管しなくてはならず、同じ妖精が管理することが望ましく、図書館の職員は何百年も図書館で働いていることが理想だった。つまり、色々な理由をこじつけられて、この仕事を任されたのである。図書館は昼夜問わず開いており、それは他の公共施設、店、飛行場等も同じだった。

中央図書館はヴルーベリ男子学院の図書館より何倍も大きく、男子学院の敷地くらいありそうだった。そして20階建ての建物の中の、15階が図書館だった。手押し車に本を乗せて運んでいるとはいえ、体力勝負の仕事だった。ヴルーベリでは主に本の修復をやっていたので、中央図書館の仕事はきつい以外の何ものでもないし、体力さえあれば誰でもできる仕事だった。一年間この仕事をしているが、この仕事についてしまったことを、後悔している。仕事から帰ってきて、ベッドに横になっていると、よくヘリオトロープがやってきて、回復魔法？をかけてくれるから、疲れは残らない。それがなかったらとつくにやめている。

月影はまぼろし山にある遊園地、フェアリーランド（この大陸が『フェアリーランド』と呼ばれる前からある遊園地。）へ行く飛行船のガイドをしている。僕は彼やデスコルをお兄さん、お父さんと呼んだことがないが、それについて咎められたことはない。月影は馬の妖精エフィールと結婚の話をよくしている。そんな彼は自分が飼っていた馬が妖精で、人型になれると知るまで時間がかかったらしい。そして周囲も馬が妖精であることは黙っていた。月影は馬だと思っていた時に、馬を馴らした時の思い出を話してくれる。今も時々彼は馬に乗ってどこかへ行っている。僕が直接見たわけではないが、馬の姿のままのエフィールとSEXしていたところを見られて、ヘリオトロープに怒られていた。僕は時々彼が分からない。小さい頃からフェアリーランドで暮らすとあーなるのかもしれないけれど。

### 第3節 ミントです！

ある休日のことだった。ゆっくりと朝食をとっていると、月影がフェアリーランドの本日付フリーパス券をくれた。

「あ：ありがとうございます。」

「俺、今からエフィールに乗って出かけるわ。行き先は言えないけど、夜になっても帰ってこないつもりだから。」

「そう。」

「本当は友達とフェアリーランドに行くはずだったけど、友達が着たら『行けなくなった』って代わりに謝っておいてくれる？」

「別にいいけど。」

「ありがとう。じゃあ俺はもう行くから後はよろしく！」

月影は僕の肩を軽く叩くと、急いで行ってしまった。まるで何かから逃げるかのようだった。

僕は食器を洗って、ソファアの上で横になっていた。そして、うとうとと眠っていた時だった。

「こんにちはー！ つつきー！ いるんでしょ？ 早く出てきて〜！」

ドアをドンドンノックする音がして、煩い女の子の声が出た。聞いていてイライラしたのは、眠りを妨げられたからだ。

僕は手で乱れた髪を直して、ドアを開けた。

「わっ！ びっくりした！」

女の子は、僕を見ると手を引っ込め、後ずさりして驚いていた。彼女はひらひらのミニスカートに、キャミソールという、フェアリーランドならではの露出度の高い服装をしていた。彼女の髪は、ピンク色で、耳はどんがっていて、背中にはトンボタイプの翅が四枚、X字形についていた。『妖精』と聞いて、第一に思い浮かぶような、典型的な妖精の姿をしていた。

「あの…何の用ですか？」

「つつきーいる？」

「つつきー？ もしかして、月影のこと？」

「ピンポーン！ ねえ、つつきーは？」

彼女は上半身を横に倒して、家の中を覗いた。

「今出かけているんだ。」

「うっそ〜！」

「本当だよ。」

「だって今日はフェアリーランドに行く約束していたんだよ？」

彼女が月影の、一緒にフェアリーランドに行くはずだった友達だった。婚約者がいる身分で、女友達と遊園地でデートするうらやましい約束をしたものの良心が痛んで、あるいは彼女に怒られて、月影は女友達との約束を破って行ってしまった。

「急用ができたって言うていたな〜。」

——嘘だけだ。

「ねえ、あなた誰なの？」

彼女は機嫌悪そうに聞いた。

「僕の名前は未来人。一応月影の腹違いの弟ってことになっているんだ。」

「ほえ〜。初めて知ったよ〜。」

「そういう君は？」

「あたしはミント。ミント・メリーリングよ。月影とは、サンドリヨン妖精学校からの知り合いなのよ。」

「サンドリヨンを養成する学校なの？」

「さむいんだけど。」

「ごめん。君は何の妖精なの？」

「え？あたし？あたしはあ花の妖精よ！」

「つてことは男なんだ？」

「ブー！可愛いおっぱいが見えないの？あたしは女よ。」

ミントは手にすっぽり入る胸を両手で押さえて言った。

「でも花の妖精は皆男じゃないの？」

「男もいるけど、女の方が多いわ。花の妖精のうち、3分の2は女なんだから。」

「そうなんだ。知らなかった。僕が会った花の妖精は男だったんだ。で、男が男と結婚していて…。」

「あたしの両親も女同士で結婚したわよ？」

「え？」

「あたしの一族は女しか生まれないから、同じ種族同士で結婚すると、こうなるのよ。」

つまり、男女に分裂する花の妖精のうち、3分の2が女で、彼女らはピンク色の髪の手をしていて、耳がとがっていて、トンボタイプの翅が四枚X字形になっている。一方3分の1を占める男は、黄色い髪をしていて、普通の耳をしていて、蝶の翅がついている。ミントは、彼らの蝶の翅がうらやましくて仕方ないようだ。女の方の翅が単純である代わりに、彼女たちの胸は男が男女に分裂した後の女の方の胸より、若干大きく、彼らはそれを強調するかのように露出度の高い服を着ている。しかし、それでも他の妖精に比べると、えばれる大きさではなかった。

#### 第4章 ゴー！ゴー！フェアリーランド！

フェアリーランドのフリーパス券が今日しか使えないので、僕は月影の代わりにミントとフェアリーランドへ行く事になった。

二人で飛行船着陸場で待っている時、会話もせず、黙っていると、ミントに「あーあ。本当はつきーと行くはずだったのに。」

と、言われてしまった。

「ごめんね、僕で…」

僕は女の子とこうして出かけることがなかったので、こういう時どうしたらいいかわからない。しかも相手は妖精で、こっちが考えていることが筒抜けだ。

「ねえ、『みっくん』って呼んでいい？」

「え？いいけど。」

彼女の顔を見ると、ミントの口元が僅かに笑った。

「飛行船が来たわ！」

「え？あ、本当だ。」

飛行船はゆっくりと地上に降り立ち、その場にいた数十人の乗客を乗せた。

ミントは僕が彼女の隣に座ると、すぐに話始めた。

「ねえ、みつくん。つきーは馬と結婚しちゃうのかな？」

「ああ。馬とね。最近をよくその話をしているんだ。」

『馬と』と聞くと、月影が猥雑している場面を思い描いてしまうから嫌だ。

「そう。あんな女と？あたしよりあの女を選ぶのね。」

ミントは急に嫉妬に狂う女になっていた。

「月影のことが好きなんだね。」

「うん。でもあのことがあってから急に冷たくなっちゃって。しかも馬が人型になれるって分かって、付き合いだしてからは二人つきりでは会ってくれなくて…。」

「あのことって？」

「彼とSEXしたんだけど、彼の陰毛が嫌で泣き出しちゃって、それでも入れさせたんだけど、初めてだったからすごく痛くて、しかもその後なぜかあそこがかゆくて、それをつきーの所為にしちゃって、彼と喧嘩になって、友達に相談したら、いつの間にかクラスの皆がその事を知っちゃって、大騒ぎになったんだ。」

「それは嫌われるかもね。」

「知らなかったのよ、人間のおちんちんに毛が生えているなんて。あたしあれから随分勉強して、多分だけど陰毛も克服したと思うんだ。でもキスもしてくれなくて…。」

彼女の目から涙が落ちたと思うと、ミントは大声で泣き始めた。彼女が周囲に聞こえる声でSEXの話を始めたことだけでも恥ずかしいのに、ミントの泣き声で周囲の妖精の避難の的になった。

「泣かないでよ。」

「だあって。まだつきーが好きなんだも〜ん。」

ミントは足をバタバタさせて泣き叫んだ。

「ミントならすぐにまた恋人ができるよ。」

「本当？」

「本当だよ、だってミントは可愛いもん。こんな可愛い妖精見たことないよ。」

ミントはしばらくの間泣き止んで、僕の顔を見ていたが、

「わざとらしいのよ！」

と、再び泣き出してしまった。

## 第5章 情けない後姿

フェアリーランドに着くと、彼女は急に泣き止み、僕の手を取って走り出した。そして



手当たり次第乗り物に乗った。しかし、どれも絶叫マシンばかりだった。

僕はハイスピードの乗り物にはついていけず、ベンチで休んでいると、

「んもう！ つつきーだったら、どんな乗りものでも一緒に乗ってくれるのに！ みっくんつまんない！」

と、言われてしまった。人間の世界では馬より早い乗り物はなかったのに…。

次に僕とミントは、フェアリーランド内にある動物園と、水族館を回った。妖精は体の半分が動物なのに、動物園など作って、違和感を覚えたりしないのだろうか？

「ねえみっくん、あれ買って？」

彼女はお土産屋さんに売られているペンダントを指差した。僕はお財布を開け、彼女にペンダントを買ってあげた。彼女は喜んで御礼を言った。

「ねえ、ペンダントつけてくれる？」

ミントは、長い髪を上上げた。白いうなじと、僅かに見える胸の谷間が綺麗で、思わず顔を近づけた。彼女の顔が僅かに振り返り、軽く笑った。僕は顔を赤くし、急いでペンダントをつけた。

「どう？ 似合う？」

彼女は僕から二歩下がり、言った。

「うん。」

「ありがとう。」

彼女はウインクして、投げキッスした。僕は一瞬で頬が赤くなった。

「ねえあれ乗ろう？」

もうすっかり暗くなり、最後に彼女が指差したのは大観覧車で、まぼろし山の全てが：

見えるわけではないが、遊園地の全てが見えた。

「わー、すごくてかい！」

「ミントは翅があるからこれくらいの高さまで飛べるでしょう。」

「ううん。あたしは木の高さまでしか飛べないよ？」

「へえ。」

観覧車は、次第に頂上に近づいてきた。

「あっ！ 玉宮が見える。」

僕は遠くに見えた白いお城を指差した。

「あれは偽物よ。」

「偽物？」

「そう、玉宮の姿を真似して作った、ホテルよ。」

「そうなんだ。」

ラブホテルのかな？ そう思っていると、ミントが僅かにため息をつく音が聞こえた。そして、彼女の顔を振り返って見た。

「本当は今日ここでつきーに告白して、ラブラブになってキスして、それから先もいっちやって、もう一周するつもりでいたんだ。」

「それは…残念だったね。」

「うん。今日のために新しい下着買って身につけているっていうのに…。」

「……。」

返す言葉がなかった。真向かいに座っているミントがうつむいたと思うと、また泣き出した。

「泣かないですよ。」

僕は彼女の隣に座って、彼女の顔を覗いた。

「見ないで…泣き顔はブスなんだから。」

彼女は僕の肩にもたれこみ、僕はそのまま動けなくなった。

「月影のことは本当に残念だったね、でも元気だしてよ、愚痴なら聞くからさ。」

帰り際、飛行船の中で彼女の横顔を見て言った。

「ごめんね、みっくん。あたしが好きなのはつきーなの。あなたじゃないわ。」

「え？」

「誤解がないようにしようと思って。みっくんはとってもやさしくしてくれたけど、やっぱり足りないの。ごめんなさい。」

「…いいよ、別に。」

胸が痛かった。正直何が悪かったかは分からない。そしてどうしてそんなことを言われなければならぬのかも分からなかった。彼女の隣に座っている時間が、すごく辛かった。

もう彼女には会いたくなかった。が、会ってしまうのであった。

## 第6章 結婚式で

月影が結婚した。そしてパーティーには数百人の妖精が集まった。こんなに多くの妖精がいたのに、僕はミントの隣に座ることになった。あの日のことを思い出してしまい、目の前の豪華な食事も咽を通らなかった。

ステージでは、月影の守護妖精のバウスが、妻になるエフィールに、守護妖精の権利を譲る儀式をしていた。

「狼から馬になるのか…。」

「え？」

今まで沈黙を守っていたミントが口を開けた。

「だから、今までつきーの守護妖精はバウスとかいう狼だったけど、この瞬間から馬になるのよ。」

「ひひひ〜んって？」

僕がそう言うと、ミントが笑った。

「あーあ、つっきーの守護妖精がああ狼男だった時はまだ、見込みがあったんだけどなく。」

「どんな見込み？」

「つっきーにもう一度振り向いてもらおう見込みよ。それが馬になったら、馬にずっと観察されるわけだから、彼に近づくことすらできないじゃない。」

「……。」

ミントはまた泣き出しそうに、目に涙をためていたが、僕が見ていることに気が付くと、こちらを見た。

「ねえ、みっくんの守護妖精は何の妖精なの？」

「…僕の守護妖精は、人魚なんだ。」

「へー。じゃあHが上手なんだ。」

「そういうイメージがあるの？…やったことないから分からないけど。」

「そうなんだ。ねえ、やったことないならあたしでためしてみる？誰でもいいからやってみたい気分なんだ。」

「本気で言っているの？」

「冗談よ。」

「なんだ。」

「でもみっくんならいいかも。」

どきっとした。

こうして僕の心に火をつけた彼女に、僕はまた引かれていったのだった。

## 第7章 仕事帰り

僕は正午から8時まで図書館で働いているのだが、帰ってくる頃には皆食事を終わらせていて、僕なんかいてもいなくてもいいのかと、子供のようなことを思ってしまう。

今日は特に疲れていたもので、すぐに帰らず、途中にある喫茶店に寄った。

「ご注文は何になさいますか？」

「じゃあ紅茶で。」

「かしこまりました、紅茶ですね？他に注文したいものはありますか？」

「他に？」

「例えば、ミントとか！」

「ミント？」

僕はその時初めて顔を上げ、ウエイトレスを見た。

「ああ、君だったんだ。」

ミントは笑顔を見せてくれた。

「ねえ、終わるまで待っていてくれる？あと1時間もないから。」

こうして僕はミントと一緒に帰ることになった。

「ねえうちに寄っていくでしょ？」

「え？いいけど。」

一体どんな家なのだろうか。レースのカーテンとかぬいぐるみとかがありそうな予感がある。

彼女の家に行くのには、飛行機に乗って地上に降りなければならなかった。僕たちの家も地上にあるが、彼女の家の方が、移動距離が長かった。移動中、彼女がまた月影のことを話してくれた。

「サンドリヨン妖精学校ってね、花の妖精が通う学校だったの。生徒の3分の2が女子で、3分の1が男子だった。で、何で月影がそこにいたかという、彼の髪の色がピンクだったからなんだって。」

「それだけ？」

「うん。でもピンク色は女の子の色だし、彼には翅がないから、すごく目立っていたんだ。」

「いじめに遭っていなかった？」

「逆よ。人間だって理由だけでみんなの人気者だったわ。特に女子にはモテて。…彼があたしだけを見てくれるように、随分がんばったわ。」

「うらやましい話だね。でも君とのSEXがうわさになってからは人気度が落ちたんじゃない？」

「そんなことないの。皆あの陰毛が一目見たいらしくて…。」

彼女はその先は言わなかった。それにしても、月影は小さい頃から女に困っていなくて、僕とは正反対の少年時代を送ったようで、大変うらやましい。

「でも知らなかったよ、ミントがウエイトレスをしているなんて。」

「本当は白天使学校に通わないといけないんだけど、訳あって休学中なの。」

「天使になりたいの？」

「ブー！白天使は看護士を意味しているの！」

「あつ、そうなんだ。」

「ねえ、わざとボケてない？」

僕は笑ってごまかした。

## 第8章 びんくはうす

しばらくたった後、飛行機が着陸した。

「メルヘンの国にようこそ〜！」

「はあっ？」

ここがメルヘンの国？ニコルとかフロールとかが暮らしていた？暗くてよく分からないが、一体僕の家とどれくらい離れているんだろうか。

「でもってここがあたしの家〜！」

ショートケーキの形をした家だった。さすがメルヘンの国。板チョコそっくりの扉を開けるなり、中からピンクの光が漏れた。壁紙がピンク。絨毯もピンク。カーテンもピンク。テーブルクロスもピンク。テレビもピンク。ソファもピンク。トイレの便器もピンクと、徹底していた。

「すごい。ピンクが好きなんだね。」

「みっくんも好きでしょ？ピンクが。」

「え？あ、うん。」

「あたしたち、気が合うね。」

「そうだね。」

いくらピンクが好きでも、ここまでする勇氣はない。

「これがあたしのパパとママよ！」

「ローズマリーですす！」

「セーラですす！」

と、二人がそれぞれに名前を名乗った後、

「どっちがパパで、どっちがママ？」

と、二人そろって言った。きっと、客が来る度にそう言っているのだろう。

「で、彼がみっくんなの。」

「よ、よろしく。」

僕は軽く頭を下げた。

「やだっつ、つっきーの弟だって言うから、どんな顔しているのかなって思ったら、あんまり似ていないのね。」

「ま、彼とは母親が違うので。」

「雰囲気も違うわ。このおずおずしているのは、いつもなの？」

「ごめんなさい。」

「ミントとはどこまでいったの？」

「メルヘンの国までです。」

「やだーっ、何言っているのよ！」

僕はローズマリーに背中を叩かれた。

「そうそう。ミントがあなたにここにお注射してもらいたって言ってたわん。」

セーラが自分のあそこをなでると、ミントが真っ赤になって彼女の頭を叩いた。

「何言ってるの！そんなこと言ってないでしょ？」

「でもいつも言っているじゃない、『みっくんにおっぱい大きくしてもらいたいの〜。』って！」

ローズマリーはミントの胸をもみ、ミントは、笑いながらも嫌がった。

「…随分仲のいい親子なんですわね。姉妹かと思った。」

「やっだく！本当のことを言わないでよ！」

また背中を叩かれた。

「ねえ、今日はうちで夕食を食べていってよ。」

「うん。じゃあお言葉に甘えて。」

僕は3人の女の子に囲まれて、夕食をとった。『お菓子しか出てこなかったらどうしよう』  
と思ったが、普通の食事が出た。

「みっくん、あーんして？」

セーラがジャガイモを僕の口元まではこんだ。

「みっくん、今度はこっちよ！」

ローズマリーも同じことをしてきた。二人とも、僕が食べるだけで大はしゃぎだった。

「二人とも、みっくんの食事のジャマしないでよ！」

ミントは何故か不機嫌そうだった。

「あーら、この子ったら、妬いているの？」

「妬いてなんかいないもーん！」

「嘘ばっかりっ！」

二人は大声で笑い出した。僕は彼女たちのテンションの高さについていけず、ただ呆れるだけだった。

食後は、セーラとローズマリーに質問攻めにされて、すっかり遅くなってしまったので、  
今夜はここに泊まって、明日の朝帰ることにした。

二人に勧められて、(一人で) お風呂に入ったが、外で笑い声が聞こえるので安心してく  
つろげなかった。

寝室に案内されたのだが、そこはミントの部屋だった。案の定、ピンクで統一させてお  
り、ぬいぐるみがたくさんおいてあった。しかもベッドのところには大きくまちゃんの  
ぬいぐるみが置かれてあった。

「あっ…。」

壁には何故か月影のポスターが貼ってあった。

「月影ってアイドルなの？」

「あたしにとってはアイドルかな。」

「そうなんだ。」

月影の隣に漫画のポスターが飾ってあった。

「ホワイト・エンジェルなるみちゃん。って何？」

「あたしの大好きなアニメなんだ。病弱な人間の男の子が出てくるんだけど、その声をや  
っていたのがつきーだったの。きやーっ！」

ミントは顔を赤らめて、両手を頬に当て、恥ずかしがった。

僕はそんな彼女を見てかわいいと思いついていけなかった。彼女を想って何度「月影はもう結婚してしまったんだよ。」と言いついて聞かせただろうか。いい加減分かってほしい。

ミントは、ジャイアントくまちゃんをベッドからどけて、机の下に置いた。

「ねえ、くまちゃんがいないとこのベッドも広いでしょ？」

「そうだね。」

ミントは毛布をめくり、軽く布団を叩いて合図した。

「もしかして、僕、ここで寝るの？」

「そうよ？」

「じゃ、お言葉に甘えて。」

僕は布団にもぐった。ミントはベッドに腰を下ろしたまま、僕を見ている。

「どうかしたの？」

「ううん？ただ、どうしようかなって思ってる。」

「どうしようって何が？」

「つまり…こういうこと。」

ミントは僕の隣で横になり、布団をかぶった。

うっそ。

「やくん、あたしったら、大胆！」

ミントは顔を赤らめた。

「ホント、大胆だね。」

僕は笑うしかなかった。

「でもね、うちには客用のベッドがないから、こうするしかないのよ。Hなことしないでね？したら絶交だよ！」

「はいはい。」

僕はこの部屋をつつみこんでいる、花の香りによって眠りに落ちた。

ミントは僕に何を求めているのだろう。僕ではなく、月影が好きなら、どうして僕が好きなのを見せるのだろうか。しかも両親に嫉妬までして、僕を独占しようとしている…。

僕はどこまで彼女に期待すればいいのだろうか。

次の日の朝、僕はミントに家まで送ってもらった。瞬間移動で一瞬で移動できた。

「昨日はどうして飛行機で帰ったの？」

「瞬間移動は事故の元だから、禁止されているの。」

瞬間移動した後の地点に、誰かいたら大変なことになるので、人口密度の多い地域では禁止されていた。まぼろし山は、瞬間移動禁止区域だった。なお、瞬間移動禁止区域でも、各地に設置させている電話ボックスによって、瞬間移動ができた。

「あたしが送れるのはここまでよ。しばらく月影に会いたくないんだ。」

僕は家の近くの野原に下ろされた。

「ありがとう、十分だよ。また会えるよね？」

彼女は少し目を逸らした。

「どうかした？」

「べつに。ただ、つきーにあたしと会っていることは秘密にしておいてほしいの。」

「どうして？」

「つきーの代わりに未来人と会っているって誤解されたくないの。」

「え？」

不安が襲った。彼女が僕に求めていたものは、月影の影？所詮僕は月影の代わりなのだろうか。

「みっくん。もしかして誤解している？」

「もしかしたら…そうかもしれない。」

「もし、あたしがつきーの代わりにみっくんと会っていると思うんなら、あたしたち、もう会わないほうがいいわね。」

「どうして！」

「さようなら。」

ミントはそのまま消えてしまった。

分からない。彼女は最初に出会った日同様、途中まではいい思いをさせるが、最後にはオチがあつて、僕はそれによって足下を掬われる。

### 第9節 開かずの扉

あたしの名前はアイレーン・エンフィールド。スターリングが男女に分裂した後の女の方。未来人が18歳になる少し前に、月影という彼の兄が突然やってきて、未来人をフェアリーランドに連れて行ってしまった。家族の中で誰一人、未来人を引きとめておく人がいなかった中、スターリングは誰よりも仲のよかった未来人とこのまま別れるのが嫌で、付いてきてしまった。ただ、ニコルがどうしても家出を許さなかったので、スターリングは男女に分裂し、男の方のマルメロはヴルーベリ屋敷に残り、あたしはフェアリーランドに行った。そして姫娥に頼んで玉宮で暮らすことになった。本当は妖精学校に通わせるつもりなのだろうが、今のところお金の準備ができていないので、何もしないでただ食べて、寝て、泳いで、姫娥とおしゃべりするだけのぐーたら生活を送っている。玉宮がへんぴな所に位置しているせいも、最近では未来人も会いに来てくれない。

あたしは玉宮に住むことが決まった日に、姫娥から小さな金色の鍵をもらった。

「どこの部屋に入ってもいいけど、この鍵で開く、あの膝下くらいしかない扉だけは開けないでちょうだいね、約束よ？」

開けてはいけない扉を開けて、あつと驚く秘密を知ってしまい、それによって城を追い



出されるというのは、昔話ではよくある話で、いつもニコルが寝るときに話してくれた。

「ねえ、この鍵を口実にあたしをここから追い出そうとしているんでしょ？」

「まあどうしてそんなことを言うの？」

「だってあたしが邪魔なんでしょ？ 追い出そうとしている魂胆が見え見えなのよ。こんな鍵は欲しくないわ、返す！」

「これはあなたの鍵よ。この鍵を持っているということは、あなたがこの家の住人だという証なの。」

姪娥にうまいこと言い包まれ、金色の鍵はペンダントになって今もあたしの首にかかっている。本当に迷惑な話だ。

### 第10節 マイクをまわさないで

ミントとの中途半端な関係はまだ続いている。しかもキスも許してくれないまま、もう半年が経とうとしている。月影にミントの話はしていないのに、僕に彼女？がいることは、家族（デスコルとヘリオトロープと月影とエフィール）に気づかれてしまった。でも彼女だったら、最低でもキスはしているはずなので、友達だと断っている。

ミントはカラオケが好きで、月に3回はカラオケに付き合わされている。僕は何も歌わずに、ぼーっとしながら彼女の歌を聴いている。彼女は一人で3時間くらい歌うのだが、お金を払っているのは僕で、彼女がカラオケルームで飲み食いした料金も僕が払っている。彼女は僕とデュエットしたいらしいが、恥ずかしくて歌えない。彼女の前で歌を歌うと、必ず文句を言われるからだ。誰でも最初から上手いわけではないのに…。彼女は歌を歌っている時はとても上機嫌で、バトンを振り回しながら、飛び跳ねながら歌っている。ミニスカートを好んで着るため時々パンツが見えるが、気づかないふりをしている。でも、こうして僕に歌や踊りを披露する以外に、それらは何かに役立つのだろうか？ つか彼女の歌を聞いているだけでは暇なので、本を広げて読んでいたら、彼女が怒りだして、喧嘩になった。彼女は涙を武器に、この喧嘩に勝利した。以来、僕は彼女の歌をよく聞いているだけでなく、手拍子、拍手をし、感想まで言うようになった。

「ねえみつくん、そろそろこの歌が歌えるでしょ？」

「えっ？」

それはある日突然やってきた。僕は彼女からマイクを渡され、無理矢理、立たされた。メロディーが流れ出し、字幕が現れた。

― 一夜限りの男 ―

(男)彼女がいなく 未だ童貞の俺に お前はやさしくほほえむ。

お前の言葉に偽りがなければ 俺は歌おう この歌を

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

あわく光るお前の唇が 俺を誘うのさ  
騙されていると知りつつも 俺はお前と離れられない

(女) 馬鹿がつくくらい 真面目な男

地味で 金なし 魅力なし

でも今夜は 返さない

他に予定がないからよ

一夜限りの 男

(男) お前のシャワーの音が 永遠に続きそうで

「待っていて」と言われたけれど 急いで俺もシャワー・イン

(女) あきれるくらい 短気な男

短小 早漏 早すぎる

でも今夜は 仕方ない

他に相手がいないから

一夜限りの 男

(男) よく見たら普通の女さ お前だって

もてない男だけを相手にする その場しのぎの女

(女) 馬鹿がつくくらい 誠実な男

(男) いるはずないさ どこにでも

(女) 今夜は こいつで我慢する

(男) お前も 落ちぶれたな

(女) あんただけは言われたくなかった

私以外の女となんて 1000年早い

でも今夜は会ってくれないのね 他に相手がいるから

一夜限りの 男

あたしの人生 偽りだらけだった

あなただけでも いてくれたらよかったのに  
死ぬことが許されないのなら 最後に歌おう この歌を

(男女) 馬鹿がつくくらい 真面目な男

出会って 別れて それっきり

あれからどうなったのか 分からない

誰も相手がいないなら また会いましょうよ

一夜限りの 男

ミントはこの歌をほぼ毎回歌っていた。しかも、この歌の詩が自分と重なっているように、ライトモチーフのように頭の中を回っている。

「ねえ、何なの？この歌は！『一夜限りの男』って僕のこと？毎回この歌歌われるとき、こっちは不愉快なんだけど。」

「ああんっ、次の歌が始まっちゃう！」

ミントは僕を無視して次の曲を歌いだした。

みてみてみてみて マイ・ダーリン

あたしのあたしの このパンツ

今日は特別 大胆なわーたしー！

水色の 雨粒は楕円形じゃない

デブでブスとは言わせない

あなたごのみの 女の子なのーっ！

もう勝手にしてほしい。歌にケチつけていてもしょうがないが、歌で自分の気持ちを誤魔化されているようで、おもしろくない。それでも彼女がカラオケに行きたいと言うと、一緒に行ってしまう。断ったこともあったが、彼女は一人でカラオケに行くことができないうと、泣きつくのだった。基本的に僕は歌わないわけだから、一人で行っていると変わらないのに…。後で、彼女は僕にお金を払ってもらったためだけに僕とカラオケに行っているのだと分かった。でもこのことを非難したら、きっと彼女は涙を武器に、自分を正当化するだろう。僕も女に生まれてくればよかった。

### 第11節 カップルで行くツアー

「今度二人で旅行にでも行くこうか？」

僕は彼女の仕事の帰りに、そう切り出した。

「ほえ？」

「ミントは驚いて僕を見ていた。そして、手を口元に近づけた。嫌？」

「ううん、嫌じゃないよ。ただ、お金の方は大丈夫？」

「もしかして、僕が全額負担しなければならぬのだろうか。」

「大丈夫だよ、多分。」

僕はミントと会ってから、予告なしにプレゼントをあげなければならなくなったり、どこか分からないところに連れて行かれたり、カラオケで高い飲食物を注文されたりと、キスもしてくれない彼女の為に、働き、金を出し、命を削ってきたのに、ここでも全額負担しなければならぬのだろうか。僕は、二人きりの旅行の計画を持ち出したことを、早くも後悔した。

「じゃあ行くこう！これからどんなツアーがやっているのか、航空会社に見に行かない？」

「飛行機の旅か…。」

「だけじゃないけどね。」

「高くなりそう。」

「じゃあやめよっか。」

「行くよっ！行くって決めたんだし。」

「そうこなくっちゃ！」

航空会社に着き、チラシを見ながら、再び後悔。深く後悔。どれも予算オーバーだ。

「ねえ、これなんかどう？『カップルで行く、ラブラブ10日間の旅』っていうのは。」

「10日間も仕事休めるかな。」

「やっぱり無理そうだね。」

「なんとかがんばるから、そんなこと言わないでよ！」

イライラしながらも、無理矢理行く事に決めた。10日休むというのは、許してもらった。朝の8時から夜の8時まで働く日を10日間つくるだけでいいのだ。死にそうだ。お金のほうは、家族に出してもらおうわけにはいかないのです、姫娥に借りに、玉宮に行った。

## 第12節 金を借りに…

フェアリーランドでは、まぼろし山にだけ税金というものが存在して、その金を使って、まぼろし山に住みよくしていると言われているが、実はそのお金は姫娥が贅沢三昧に暮らすためのお金だった。彼女はお金を無駄遣いしてはいないし、特に欲があるというわけでもない。が、彼女が住んでいる玉宮には、相当のお金がかけられており、結果的に贅沢三昧となっている。

「と、いうわけでどうしてもお金が必要なんだけど、貸してもらえないかな？」

「姫娥は柔らかい椅子に優雅に座り、お茶を飲みながら僕の話聞いていた。」

「貸してもいいわ。でもその前に、私にお話して欲しいのよ。」

「お話？」

「ええ、レオニードからはあまりあなたの話が出てこなくて、最近あなたはどうしたのか、心配だったのよ。」

「ああ、そうなんだ。」

レオニードはこのフェアリーランドのトップで、王様みたいな存在である。そんな彼が僕の守護妖精をやっていると聞いた時は驚いたが、姪が僕の母親の守護妖精だったことを知らされてからは納得した。

「で、その彼女はあなたの大切な妖精なの？」

「大切は妖精といっても、まだ何もしていないんだけどね。」

「そう。でも何をしたかなんてことは、どうでもいいの。要は愛しているかどうかよ。」

言っていることと、やっていることが違うから。姪は基本的にSEXのない恋愛はしていないし、そのせいか僕もそれが普通だと思っていた。だから最初、何時まで経ってもミントとそういう仲にならないことが不思議でならなかった。六連なんか恋愛の対象にならない相手とでもSEXしてしまうのに、どうしてなのだろうか。

「いろいろ悩んでいるみたいだけど、何もしていないからって焦る必要はないのよ？」

「…:そうだけ。」

「私も見てみたいわ、花の妖精ミントちゃん。」

僕はふいにバトンで踊っている彼女を思い出してしまい、笑ってしまった。

「あ、ところでアイレーンはどうしているの？」

「彼女ならプールで泳いでいるわ。」

「あいつ泳げるの？」

「浮いているのよ。」

「……。」

玉宮には中央に巨大なドームがあり、その真下がプールになっている。玉宮自体は白いが、ドームの内側は蒼く、何故か天井でミラーボールが回っていて、幻想的な空間を演出していた。

プールに行くと、アイレーンは浮き輪の上に乗って浮かんでいたが、僕が来たのを見ると、プールの中に落ちた。そして、メートルに換算して、水深約10メートルのプールで溺れた。

「何であんたがいるのよ！」

必死で浮き輪に掴まって、プールサイドに上がったアイレーンは、何故か怒っていた。

「時々なら来てもいいかなって思って。迷惑なら帰るよ。」

「別に今すぐ帰れなんて言っていないじゃない。」

彼女がそう言うと、彼女の胸元で金色の鍵が光った。

「ねえ、その鍵どうしたの？」

「どうだっていいでしょ？勝手に人の胸見ないでくださいー！」

アイレーンは鍵を押さえて言った。

「別に胸なんて見てないって。」

一緒にいた時は気づかなかったが、ミントの言う通り、男は女より少し胸が小さかった。

それから、僕は3人でいろいろと思い出話を中心におしゃべりをしたが、ミントのことは話さなかった。玉宮を出たのは暗くなってからだが、お金を貸してもらったので、気分は明るかった。

### 第13節 家族との会話

僕は月影にカバンを借りて、旅行で使う荷物を詰めていた。

「旅行に行くのか？」

誰かと思えばデスコルだった。彼は僕の部屋の入り口に、寄りかかるように立っていた。

「う、うん。」

「誰と？」

「別に。」

「ヘリオがお前に女ができたと言っていたが、本当か？」

「さあどうだろうね。女は女でも友達だし。特別な存在っていうのには程遠いかも。」

「でもこの10日間で勝負にでるわけだ。」

「そ、そんなんじゃないよ。そりゃ、何かあることを期待しているけど。このまま何も進展なしって言うのもありえるんだよ。」

「そうか。」

「ねえ、ずっと気になっていたんだけど、ヘリオトロープとは何ともないの？」

「どうして？」

「同じ屋根の下に住んでいて、魔が差してSEXとかしないのかな。六連だったらありえるなーって思ってる。」

「あいつは一瞬で性別を変えられるから、そういう関係にはならないんだよ。」

「…そうなの？」

「ああ。一緒に住んでいるからって何が何でもSEXしなきゃならない訳じゃないよ。」

「そうだね。ひよっとしたらヘリオトロープも嫌いなんじゃない？」

「何を？」

「デスコルのチン毛。」

ところで月影は結婚しても家を離れてはいなくて、今まで通りの生活をしている。結婚して、半年が過ぎた今も『子供の話』が出てこないの、さりげなく聞いてみた。

「ねえ、子供は何時できるの？」

「お前はエフィールの母親か！」

「え？」

何故か怒られてしまった。彼女の母親と何かあったのだろうか。

「子供は当分つくるつもりはない。」

「何で？」

「二人の時間を大切にしたいから。つくるとしたら、30歳になってからかな。」

「ふーん。」

二人の時間っていつでも、一緒に僕とかも住んでいるわけだから、完全に二人つきりにはならないと思うのだが。

「ねえ未来人、珍しく旅行に行くみたいだけど、お金は大丈夫なの？」

ヘリオトロープがやってきた。

「実は足りなくて、姪娥から借りてきたんだ。」

「どうして私に相談しなかったの？」

「迷惑かけたくなかったし。」

「でも借りたお金ははずれ返さなければならぬでしょ？これ、少しでも持っていきなさい。」

ヘリオトロープは数枚のお札を丸めて僕に渡した。

「ねえ、僕前から思っていたけど、どうしてヘリオトロープやデスコルは趣味の園芸くらいしか仕事をしていないのに、お金があるの？」

「ああ、それはね、ミルナがここに連れられた後、いろいろお金を使ったのよ。発作的にね。で、私は後でデスコルが全部支払ってくれるという約束の下で、彼女にお金を貸して、

月影を学校に通わせたの。」

「デスコルはちゃんとお金を稼げたの？」

「いいえ。でもそんな時に、ニュースが飛び込んできたのよ。」

「どんな？」

「デスコルの生涯を映画にしたいという。」

「ええっ！」

「それでね、その映画は『スバル』という名で知られて、シリーズものになったのよ。」

「ちよっと待って、六連は怒らなかつたの？」

「それどころか、自らコマーシャルに出演していたわ。」

「す、すごいね。」

「そういうわけだから、その映画のおかげで、私たちもちよっとはいい思いをさせてもらっているの。」

僕はフェアリーランドに来て、驚いてばかりいる。僕たちがいた世界は、水道管は通っ

ていても電気はなく、ランプの火による生活だった。電話もテレビもパソコンもないし、カメラもない。これではないものだらけだ。妖精がフェアリーランドだけに住みたがる理由が分かる。僕が今住んでいる家は田舎の家なので、まぼろし山にある家とは、まったくつくりが違っていて、不便な点もいくつかあるだろうが、それでももとい世界よりかはましだった。

ところで六連はなぜ映画が放映されてから、逮捕されなかったのだろうか。別に逮捕してもらいたいわけじゃないが、フェアリーランドの法律はどうなっているのだろうか。それとも姫娥が六連をかばって無理矢理無罪にしたのだろうか。十分にありえる話だ。

#### 第14節 おっぱいがいっぱい

旅行に行く当日、前もって野原でミントと待ち合わせして、集合場所のまぼろし山の飛行場の出発ロビーに向かった。僕はバッグ一つに納まったが、ミントはトランク二つだった。

「ああーん、もう信じられない。なんでこんなに重いのか？」

彼女は疲れると、よくしゃがんだ。

トランクには車がついていたが、土の上を引きずることはできなかった。

「ほら立って！」

パンツが見えるんだよ。

「ブーっ！みっくん持ってよ！」

「しようがないな。」

僕は三つのカバンを手に、空港までいったが、集合場所にいた妖精たちは、当然のことながら皆カップルで、僕とミントよりお互いの距離が近かった。

『『カップルで行くラブラブ10日間の旅』によるこそ！私がガイドを勤めさせていただく、コムギで〜す！』

僕らは、言われるがままに機体に乗った。彼女が窓際で、僕が通路側の席だった。実は飛行機の飛んですぐの、飛行機が斜めに飛んでいる時が怖くて、いつも神様にお祈りしてしまう。

飛行機が無事に飛んで、シートベルト着用サインが消えた時だった。向かい側の窓に座っていた妖精のカップルが、突然服を脱ぎ始めた。

「バイブなどの電子機器類は、飛行機の進路に影響を及ぼす恐れがあるので、機内では電源をオフにしておいてください。」

と、機内放送が流れた。

「ええ〜っ！」

僕は驚いて周囲を見回したが、どの客も服を脱いでおり、20カップルのうち、服を脱いでいないカップルは僕とミントだけだった。他のカップルは、人目も気にせず愛し合い



始め、悩ましげなあえぎ声が機内を包み込んだ。

「ど、どうなっているの、これ？」

ミントを見ると、彼女は震えていた。

「どうしたの、大丈夫？」

「ねえみつくん、あたしも裸になって、みつくんの膝の上に乗って『メイク・ラブ』しなきゃだめ？」

彼女は泣きそうな声で訴えてきた。

「ああ、彼らはやりたいからやっているだけであって、やりたくなければやらなくていいんだよ。」

「本当？」

「うん。でもうらやましいな。」

「みつくんもやりたいんだ：メイク・ラブ。」

「う、うん。」

「つつきーとだったら、やってもよかったな。」

「え？」

まただ。

「だってつつきーは一応『愛している』って言ってくれたもん。でもみつくんは言ってくれない。何時までたつても。」

「ねえ、その一言さえ言えば、とつくの昔に恋人同士になっていたの？」

「……」

ミントはそれから何も言わなくなった。僕は周りで揺れるいっぱいのおっぱいにより、火照ってしまった身体と押さえきれない欲求に苦しんでいた。ミントはそんな僕を軽蔑しているのか、怒っていた。

「ミント、どうしたの？」

彼女の肩に触れると、彼女は

「勝手に触らないでよ、変態っ！」

と叫んだ。隣で愛し合っていたカップルの動きが一時的に止まり、僕は彼らに笑われた。

ミントは涙を拭っていた。泣きたいのはこっちだ。

## 第15章 吸うなんて…

一日目は、湖畔が見えるホテルに泊まった。

ミントは部屋に入るなり飛び出し、ガイドのところまで行った。不思議に思ってから後を追うと、彼女が叫んでいた。

「何であたしたちの部屋のベッドが一つしかないのよ！」

「そう言われなくても。このツアーはカップルで行くラブラブ10日間の旅ですし。それにほら、カタログの右下に小さな字で書いてあるでしょ？『ベッドは全てシングルです』

って。ちゃんと読んでくださーい。」

「ほえーっ、本当だー。」

僕と一緒に寝るのってそんなに嫌？僕が凶変してレイプでもすると思ってるのだろうか。初めて彼女の家にお邪魔した時は、一緒に寝てくれたのに。

「とにかく、本社ではこのことについて責任は負えませんので、ご了承くださいな。」

「そんなにSEXが嫌なら、何もしないから安心してよ。」

「…みっくんの馬鹿。」

「何で？」

「ちよつとは進展があることを期待していたのーっ！ここは『やさしくするから、何も心配はいらない。俺が月影のことなんか忘れさせてやる。』でしょーっ？」

「ええーっ！」

僕にそんなことが言えるのだろうか？僕は一度だってそんなこと言ったことないのに。

第一、僕はそんなキャラじゃないんだーっ！

「もう知らないっ！」

ミントは泣きながら行ってしまった。

「ああ、もうどうしよう。」

「追いかけてなさーいっ！」

ガイドさんに背中を蹴られてしまった。フェアリーランドに来てから、いろいろな妖精に叩かれることが多くなった気がする。もちろん手加減されているが。

ミントは泣きながら湖畔を走っていた。僕は彼女を追いかけるのに必死で、波うちぎわで古い青春ドラマのように、何度も彼女を捕まえようとした。せめて海だったらもり上がるのに。彼女は捕まえようとする度に、風のように僕の手をすり抜けていった。それでも本当に捕まりそうになつたので、ミントは空に逃げた。その時僕は彼女のスカートを掴み、スカートがずれ落ち、パンツが見えた。おしりの割れ目が見えるくらいに小さい、イチゴもよりのパンツだった。

彼女は真っ赤になり、宙に浮いたまま、僕の顔面に蹴りを入れようとしたが、僕は必死で彼女の右足にしがみつき、彼女を波打ち際の砂浜に落とす。

「いったーい！」

「ごめんね、もつとうまく捕まえればよかったんだけど。」

逆さまに吊るされた彼女は、パンツがくつきり見え、その先にはキャミソールがめくれでいて、パンツとおそろいの、イチゴがプリントされたブラジャーが顔を出していた。

「お願いみっくんやめて！お願いだから何もしないで！」

ミントは足をバタバタさせて泣き叫んだ。彼女の頬が赤くなり、ピンクの唇が光った。

「ミント…。」

やりたくなつてしまった。確かにこの時、何か熱いものがこみ上げてきた。

僕は彼女の足を手繰り寄せ、彼女の上に自分の体を重ねた。そして、最後に唇を重ねた。夕陽が二人を照らし出し、湖面がきらきらと輝き、光りのダンスを踊っていた。

「ミント、好きだよ。愛している。今まで言えなくてごめんね。」

僕はそれだけ言うと、そっと彼女の上から退いた。

「ふにゃく。びっくりしたく。犯されるかと思ったよ。」

「犯されたかったの？」

「ううん。」

「分裂すれば逃げられたのに。」

「できなかった。」

「どうして？」

「あたしも…こうなることを望んでいたから。好きよ、みっくん。結婚しましょ、あたしたち。」

「はあ〜っ？いきなり結婚？」

拍子抜けしてしまった。

「だめなの？」

「いくらなんでも早すぎだよ。」

「何でそんなに嫌そうなのよ！今すぐいどキドキしていたのに、この気持ちは何だったの？結婚するつもりないなら、あたしとは遊びなの？」

「別に嫌ではないし、遊びでもないよ。ただ…プロポーズって普通男からするんじゃない。」

「それは人間の考えよ。妖精は形にとらわれないのよ。同性同士の結婚だってありなんだから！みっくんがあたしと結婚するつもりがないなら、SEXさせてあげないんだから！周りのバカツプルを指をくわえながら見ているといいわ！」

「分かったよ、結婚しよう。いきなりすぎてびっくりしたんだよ。」

「わ〜い！これからはずっと一緒なのね！」

「そうだね。」

「あ〜ん、あたしをめちゃめちゃにして〜ん！」

彼女は抱きついてきて、僕を押し倒し、僕とミントは、泥だらけになってしまった。その時は二人でふざけていただけに終わったが、後で二人で水着を着てお風呂に大浴場入った時、周りのお客がそこでもメイク・ラブしていて、お湯に入っていないのに、のぼせてしまった。

「みっくん、洗ってあげるね。」

彼女は手に石鹸をつけて、僕の体をなで始めた。先ず背中を洗い、胸を洗い、足を洗った。そして、太ももまで来ると、パンツのすき間に手をそっと差し込み、ブツをつかんだ。

「うっ。」

「みっくん、パンツの上じゃ洗えないんだけど。」

「ごめん、先にミントの方をやろう。」

「えっっ。」

「触らせてよ。」

「洗わせてでしょ？」

ミントは僕の膝の上に乗って囁いた。

「でもあたし、胸が小さいから、ちよっと心配。」

「そうかな、あんまり気にすることないよ。」

「本当？でも、花の妖精にしては大きいでしょ？」

「そうだね。」

僕は彼女の水着のブラジャーを外した。

「あっ、だめ！」

「もう遅いよ。」

彼女の胸を両手でつかむと、彼女は手を口元に持っていき、恥ずかしがった。泡だらけの指で彼女の胸をなでまわす。お湯でアワを流すと、薄いピンク色の乳首が光った。僕は彼女を抱きかかえ、膝の上に乗せ直し、鏡に向けて股を開かせた。そして、鏡に映る彼女を見ながら、彼女の唇を丁寧にした。そして、シャワーで流す時、ただ流すだけではつまらないので、シャワーの水の出口を押さえて、真ん中にお湯が集中して出るようにして、勢いよく出ているお湯を、彼女のあそこに当てた。

ピクンと動いた。

「ああーん、ヒクヒクするっっ！」

僕は彼女が逃げないようにしっかり押さえつけた。そして右手にシャワーヘッドを持って彼女を快樂の渦に引き込み、左手で彼女の胸をもんだ。そして彼女の背中の中の根元をなめだすと、彼女はあえぎ声を出しながら身をくねらせ、喜んだ。

もつと早くこうしたかった。彼女をこの手で抱きしめ、この快感が味わえるのなら、月影の代わりでも、他に男が出来るまでのつなぎでもよかった。

彼女はそつと僕の固くなったペニスを手に取り、吸い始めた。絶叫しながらも、次に何をしようか迷った。

「ああん、くちゅくちゅして。」

「え？もしかしてクンニしてほしいの？」

「うん。」

何故かすごく緊張する。ミントは妖精だし陰毛も生えていなく、きれいなのでクンニリングスすることに抵抗はなかった。でも彼女は喜んでくれるだろうか。そして例の液体を口にできるのだろうか。

月影はクンニリングスをしてくれなかったらしい。僕は彼女の花びらと、その核をなめ、刺激した。その時、女はクリトリスから尿を出すのだと思ったが、違うらしい。でも彼女に目の前で「おしっこ出してみて？」と言っても決して出してはくれなかった。そうい

ばスターリングの父親が、ニコルがトイレに行ったところを見たことがないと言っていた。妖精には人前でもよおしてはいけない決まりでもあるのだろうか。

グチュグチュ

彼女のあそこがひくひくいって、気持ちよさそうに音をたてた。僕はあの花の妖精の精液を口にすることができ、すっかり酔ってしまった。僕が顔を上げ、立ち上がると、彼女も立ち上がり、首に腕を回し、右足を上げてきた。僕は彼女の細い腰をつかんで持ち上げると、彼女の狭い入り口に、自分の肉棒を差し込んだ。ゆっくりと入っていく…。そして、繋がった。

「…みっくん。」

ミントは目を細めて、切なそうな声を漏らした。

「ミント。」

僕たちは汗まみれだった。そして、繋がったまま、湯船に飛び込んだ。間違った湯船の入り方に、非難の声はなかった。皆同じ事をしていたのだ。

### 第16節 できるかな

夜、二人で横になっていると、子供の話になった。

「つつきーにはまだ子供ができないの？」

「うん。30歳になってからじゃないと子供は産ませないんだって。」

「そうなんだー。」

「うん。二人の時間を大切にしたいんだって。」

「ふくん。あたしは子供がほしいな。前から子供が好きだったの。で、白天使になったら、出産に立ち会おうと思っていたんだ。」

「そうなんだ、えらいね。」

「みっくんは子供好き？」

「好きだけど…子供をつくるのも好きかな。」

僕は一人で赤くなった。どうしてこんなに恥ずかしいことを言ってしまうのだろうか。

「ねえ、何かSEXのやり方に詳しくそうだったけど、どうしたの？童貞らしくなかったんだけどな。」

「前も図書館で働いていたんだけど、官能小説とかを学生に見せないために、隔離して置いていたんだよね。だったら置くなって言いたいんだけどさ。それで処分の対象になる官能小説を選んだり、処分されるはずの本を持って帰ったりしたんだよね。それで夜一人でこっそり見ていたんだ。」

「ひとりでやってたんだ。」

笑わずにはいられなかった。

「でもそれ見てHな気分になるたびに早く相手がほしいと思っていったよ。」

「みっくん、これだけは約束してね。みっくんがSEXしたい時はいつでも相手になるか

ら、他の女とは絶対にSEXしちゃだめよ。浮気したらちんこむぎゅーだよっ！」

ミントはそう言うなり僕の息子をつかんだ。かわいい声でそんな事を言われても感じるだけなんだけど…。

「分かった。他の女とは死んでもやらないよ、約束する。」

花の妖精は嫉妬深いことで知られていると気づいたのは、もっと後になってからだ。この時は精神年齢が低いくらいにしか思っていなかった。

「よーし、がんばって子供つくるぞーっ！シックス・ナイン！」

彼女は妙な呪文を唱えるように69と言うと、そのまま僕の息子を取り出し、僕にかわいいおまんこを向け、フェラチオを始めた。僕もクンニリングスを始めた。

### 第17節 未来人近況報告

今夜もレオニードと姪は部屋を暗くして、裸のままベッドのなかに滑り込んだ。レオニードが姪に口付けをしようとした瞬間、姪は人差し指を彼の唇にそっと当てた。

「レオニードは軽く声を漏らし、起き上がった。」

「どうかしたのですか？母上。」

「未来人のことが気になって。どうなったか教えてほしいのよ。」

「分かりました。では今夜未来人が彼女にしたことをそのまま再現してさしあげましょう。」

と言うとレオニードは机の引き出しから筆を取り出し、その他の大人のおもちやを取り出した。そして、姪に目隠しを言った。

「ホテルにはSEXの時に使う道具がいくつも置かれていましてね。二人が選んだのはこれです。」

レオニードは姪の乳首を筆でなで、円を描くように乳首をなぞった。

「ああんっ。もつとやって。」

レオニードの筆は下の方に向かい、あそこに到達したと思ったら、足のほうに飛んで、それからまたあそこめざして動き出した。だがまたしてもあそこには到達せず、首筋に飛んだ。レオニードは姪の体を起こし、膝を曲げ、左手でバイブを挿入し、入れたまま、筆で乳首をなでまわした。

「ああん。」

姪は身をくねらせ、ねっとりした愛液を出した。レオニードはバイブを取り出し、それをアイスキャンディーのようになめた。そして再び挿入した。小刻みに震えるバイブをすばやく出し入れし、姪は快樂のどん底に落ちていった。

「ああん、レオニード、入れてっっ！」

姪は目隠しを外した。レオニードはそれを見ると軽く微笑み、断った。

「その前に母親にしてもらいたいことがあります。新人類の精液は妖精のように催淫作用がないばかりでなく、まずいのです。おまけにミントは陰毛が好きではない。そこで未来

人のペニスにこれをたらしめたのです。」

レオニードは自分のペニスに蜂蜜を塗った。

姫娥はレオニードのペニスを優しく豊満な両胸ではさみ込むと、蜂蜜をなめ始めた。いつもより多い唾液を分泌しながら、太く、大きく、そして硬く成長するように丹念に、隅々までなめた。そして時々、汁がたっぷりの果実を食べるように球を頬張った。

「ッ！」

レオニードは姫娥の口の中に精射した。口の中で、ザーメンと蜂蜜が混ざり合い、心地よいハーモニーを奏でていた。

「未来人はここで彼女の中に入れていきます。」

「あなたも入れてちょうだい。」

「アレンジをくわえていいですか？」

レオニードは姫娥のあそこを天井に向けて、彼女の体と自分の体が交差するようにして入れた。そしてズゴズゴ上下運動をすると、二人の愛液がすき間から飛び出てきて、滝のように流れ出した。

「あああくん、もっともっと。」

この夜はこれ以上未来人の話を続けることができなかった。

### 第18節 彼には秘密

ラブラブ10日間の旅は、あつという間に終わった。でもこの旅は十分すぎるほどの結果をもたらしてくれた。しかも余った金で大人の玩具を買ってしまった、僕が持ち帰ることになった。

まぼろし山についてのは思ったより早く、まだ明るかったので、僕たちは遊園地の観覧車に乗った。

「ここから始まったんだね。」

「うん。」

「SEXしようか？」

飛行機の中でもしたのだが……。ミントは僕の膝の上に乗った。ミントはSEXしている時に限らず、よく僕の膝の上に乗った。そしてキスや、内緒話をするのだった。

「ねえ、結婚のことだけど、月影には黙ってくれる？」

「いいけど、どうして？」

「彼には結婚を反対されたくないから、式まで黙っていて。それとあたしはみっくんの守護妖精に頼んで、あたしをみんくんの守護妖精にしてもらおうわ。それで式で正式に守護妖精を交代するんだ。」

僕はふと、レオニードのことを思い出した。姫娥に彼を紹介してもらった時、僕は緊張のあまり彼とほとんど口をきかなかった。彼がどれほど僕に執着しているかは分からない。ただ、彼はすんなり僕を手放してくれるだろうか？

「それまで結婚できない？」

「ううん。これから役所に言っただけで登録すれば結婚していることになるよ。」

「じゃあ、この後行く？」

「そうね、早ければ早いほどいいかも。」

ミントは僕との結婚を焦っていて、早く確実なものにしたがっていた。僕たちは観覧車を一周だけで終わらせ、役所へ行った。

僕たちは紙にサインをし、拇印を押した。それだけで結婚は完了するらしい。離婚する時にはその紙を破いて燃やすだけでいいらしい。

何か足りない気がするが、僕たちは結婚した。僕は彼女の家へ両親に挨拶しに行った。

### 第19節 いとしのレオ様

ミントは中央図書館で未来人の守護妖精を調べていた。

「名前は未来人。男。年齢19歳。新人類。家族構成…父親デスコル。兄月影。フェアリーランド在住。検索開始っ！」

『検索中』という表示が出て、やがて画面が切り替わった。

「何々？レオニード・アリオナフ。フェアリーランドの最高責任者。人魚。4368歳。独身。玉宮に在住。」

そして彼の業績がずらーっと下に続いていた。

「な、なにこれ！何かの冗談でしょ？」

ミントがずっと下を見ると、一番最後に未来人のデータが載っていた。

「ええっ！みっくんの守護妖精ってレオ様だったのお？」

ミントはそこが図書館であることも忘れ、大声を出したため、警備員によって外に出されてしまった。

ミントは早くも未来人と結婚したことを後悔した。でも未来人は優しいから、もしかするとレオ様もとても優しい妖精で、ミントに未来人をくれるかもしれない。だがこれは勝つ確率が非常に低い賭けだった。彼女は喫茶店の店長にまたしても休みをもらって、玉宮に行った。玉宮に行くのは、サンドリヨン妖精学校の遠足の時以来だった。

はぼ半日かけて玉宮につくと、レオニードは不在だった。ミントは涙をこらえて待つことにした。だが、何時までたっても帰ってくる雰囲気じゃないので、庭を散歩しにいった。お花畑を通り、果樹園を通ると、野原に出た。そこには馬が放牧されていて、思わずエフイルを思い出してしまった。ミントは空を飛び、誰かいないか探してみた。玉宮には100人近くの使用人がいてそれぞれが仕事をしているはずなのだが、さきほどレオニードは不在だと教えてくれた使用人以外は見つからなかった。

ミントはドームの上を上り、ドームについている小窓から中に入った。すると、一瞬にして青いプールが見えて、無数の星がきらきらと回っていた。プールサイドでは蝶の翅を



持った金髪の妖精がクリームソーダーを飲んでるのが見えた。

「ごめんください！」

ミントは空から降りてきた。

「誰？」

「ミント・メリーリングです！」

「あたしはアイレン・エンフィールド。」

「ねえアイレンちゃん、あたしレオ様にお願いがあってここに来ただけど、いつ帰ってくるか知らなくない？」

「知らない。」

アイレンはクリームソーダーを飲みながら言った。

「レオニードに何の用？」

「うんちよつとね。レオ様が守護している人間をあたしに譲ってもらいたくて。」

「なんだって！」

アイレンは立ち上がった。

「ほえっつ、びっくりした。どうしたの？いきなりっつ。」

「未来人とはどんな関係なの？」

「うん。まだ秘密なんだけど、先日彼と結婚しちゃいましたっつ！」

「なんだってっつ！」

「アイレンちゃんこわっつ！」

ミントは両手をグーにして口元に当てて震えた。

「そんなの認めないわ、何かの冗談でしょ！」

「ブー！本当だもくん。あたしたち、愛し合っているんだから。そういうアイレンちゃん  
はみっくんの何なの？」

「あたしは…未来人はあたしの弟なの。」

「ふくん。つきー以外にも兄弟がいたんだ。」

「正確に言えば従兄弟だけだね。」

「な〜んだ。」

「なんだじゃない。あんたみたいになぶりぶりてふにやふにやな女が未来人と結婚するなん  
て聞いてない！」

「うん。でも結婚しちゃったし〜。それにあなたと結婚するよりはいいと思うな。ア  
イレンちゃんは未来人の従兄弟だし、本当は男なんでしょ？それに胸もないし。色気ゼロ  
なのよ。」

アイレンはミントの台詞にカチンとなってクリームソーダーを彼女の顔面にかけた。

「ひっど〜い！なにをするのよっつ！可愛い顔が台無しじゃなくない！」

ミントはプールの水で顔を洗った。

「あんたなんか可愛くもなんともないわよ。」

アイレーンは彼女の背中を蹴って、ミントはプールの中に落ち、溺れた。

「だ、だれか！助けて！た、たすけて！」

「泳げないの？泳げなかったら、翅を動かして飛べばいいじゃない！」

アイレーンは自分がこんなに意地悪になれることを今初めて知って、驚きを隠せないでいるが、ミントを見ていると、何故か怒りがこみ上げてしまい、どんな残酷なことでもできてしまう気がした。

結局、ミントは姮娥に助けられた。アイレーンは姮娥に叱られたが彼女の気はおさまらなかった。

## 第20節 あなたは首です

レオニードは早朝に帰ってきた。彼は秘書のトーマ・ブラックマンと共に雑談をしながら、廊下を歩いてきた。ミントは急いで彼らの前に飛び出し、土下座してお願いした。

「レオ様、お願いがあります！あなたが守護している未来人を私に譲ってください。私が彼の守護妖精になりたいのです！」

「レオニードさん、この方は誰ですか？」

「未来人の花嫁です。」

「ああ、それでこうしてお願いに来ているわけですね。」

トーマは犬の耳と、尻尾と首輪のついたレオニードの秘書だった。

「お願いします！」

レオニードはしばらく黙っていたが、口を開いた。

「大変申し訳ないのですが、あなたを彼の守護妖精にすることはできません。どうかこのまま引き下がってくださいませんか？」

「くううううう。」

ミントはかわいらしいうなり声をあげると、顔を上げた。

「無理を承知でお願いします。」

「不可能です。」

「そこを何とか！」

ミントは顔を真っ赤にして言った。

「あなたが未来人の守護妖精に進んでなりたがる理由は何ですか？」

「あたし、みつくと愛し合っているところをレオ様に覗かれたくないんです！」

トーマが思わず噴出した。

## 「却下！」

レオニードはそこら中に響き渡る声で叫んだ。

「うわ！っ、びっくりした！っ。」

トーマは犬耳を手で塞いだ。彼に耳が4つあるのは仕方がない。

「レオ様おねがうっ！」

ミントは両手を組んで、わざとらしく目を輝かせてお願いしたが、レオニードに黙殺された。

「ごめんねっ。」

トーマはミントの頭に軽く手を乗せて、レオニードの後を追って走った。

ミントはため息をついて一休みした後、今日も仕事を休むことを伝えるため、喫茶店に電話した。すると声を出すなり怒鳴られ、店長と喧嘩になり、喧嘩の末、首になってしまった。

「ひよええええっ！」

## 第21章 したごころを、君に

ミントはレオニードのせいで失業してしまったことを報告しようと、レオニードを探した。だが、玉宮は広く、すっかり迷子になってしまった。疲れたので、壁によりかかって休んでいると、

「パンツ丸見えだ。」

という声が聞こえた。

ミントは急いでパンツを隠し、声の主を見上げた。

「ああっっっっ！あなたたしかレオ様のー！」

「秘書のトーマです。」

「じゃああなたはとーま君ね！」

トーマは軽く笑った。

「ねえ、レオ様知らない？あたしレオ様のせいで失業しちゃったんだけど、どう責任とってもらおうかな。」

「レオニードさんは今姫様とお食事中です。今彼の前に出るのはまずいですよ。」

「そうなんだ。あたしもお腹すいたな。」

「実は僕もなんです。一緒につまみ食いでもしませんか？」

「さんせー！」

こうしてミントはトーマと厨房に行って、食事をした。

「ねえどうしてレオ様はみっくんの守護妖精なのかな。」

「さあ。レオニードさんと彼について話し合ったことはあまりないので、僕は何とも言えません。」

「ふん。でもレオ様がどんなお方か知っているだけに、そんなすごい守護妖精をもった人間と結婚するのは、抵抗があるな。」

「……」

「しかもあたしみつくんに最大限に甘えていたから、レオ様きつと怒っていると思うんだ。どうしたらいい？とーま君。」

「それはレオニードさんの前であなたの長所が十分に発揮されている場面を見せればいいのかね。」

「そっか。じゃあレオ様の傍に置いてもらおうかな、ちようど仕事もなくなっちゃったし。ねえ、とーま君、とーま君からもレオ様をお願いしてよ。」

「わ、分かりました。」

こうしてミントは玉宮で住み込みで働くことになった。

「なんであんたがまだいるのよっ！」

アイレーンは見ると、怒鳴った。

「今日からここで働くことになった、ミントですす！」

「あなたにここで働く資格はないわ、帰って！」

「そんなこと言わないで、アイレーン。彼女だって仕事がなくて困っているのよ。」

姫娥は二人の間に入った。

「あーん、さすが姫娥様。やさしい！」

ミントがわざとらしい声で言うと、姫娥は恥ずかしそうな笑みをもらし、行ってしまった。

「ねえ、仕事がなくて暇ならさ、プール掃除の仕事をしてよ。」

「なんでアイレンちゃんの命令を聞かないの？」

「はあ？あたしもこの住人なの。あたしの命令は、この城の命令よ。」

「わかったわよ、やればいいんでしょ？」

ミントはプール中の大量の水を抜いて、デッキブラシで磨き始めた。プールは円形で、メートルに換算して直径が約500メートルあった。ミントの狭い家が何軒も入ってしまう広さだった。そこを一本のデッキブラシで磨いては、日が暮れてしまう。磨き始めて1時間たった後で思った。

「しまったらっ、分裂してやるんだっ！」

ミントはしばらく分裂していなかったで、一人の自分で満足していた。今になって普段から分裂しておけば、失業することもなかったということに嘆いてしまう。

ミントは50人に分裂して掃除した。ミントは男女に分かれると、男がロマンで女がキララだということは、この際どうでもいい。

ミントはやつとのことでプールの掃除を終えると、野原の向こうにある玉宮の使用人が住む宿舍の空き部屋のベッドに横になり、寝た。玉宮では、数百人の使用人がいるのだが、用がないときは、使用人寮で待機している。そして、電話が鳴ると、担当の使用人が玉宮に飛んでくるという仕組みになっている。なので、使用人の中には、暇をもてあましてい

るものもいるし、家庭を築いているものもいた。なぜ使用人が寮で待機していなければならぬかという点、男だったら姫娥と、女だったらレオニードと肉体関係に陥る危険性を、それぞれが察知したからである。それと、二人で愛し合っている姿を使用人に見られたくなかったからである。他にも理由があるらしいが、それ以外は思いつかなかった。

2時間ほど眠ると、犬の鳴き声で目が覚めた。窓から外を覗くと、アイレーンが黒い犬とボールで遊んでいた。

「ミントはあくびをしながら階段を下り、外に出ると、黒い犬がミントの傍によってきた。しっぽを振っている。」

「お座り！お手！」

黒い犬はミントの手に前足を乗せると、人型になった。

「と、とーま君！」

「びっくりしましたか？」

「何やってたの？」

「時々こうして運動しているんですよ。」

「そーなんだ。」

「でももう切り上げてレオニードさんのところに行きます。」

「あ、あたしも。」

「あんたはダメよ！」

アイレーンが口を挟んだ。

「ほえ？」

「話があるの。」

「では、また会いましょう。」

トーマは行ってしまった。

「話って何？」

「あの犬のことどう思う？」

「アイレンちゃん、とーま君が好きなの？」

「ちっがーう！」

彼女は何故か今にも噛み付きそうな顔をした。

「じゃあ何なのよ。」

「あの犬には気をつけた方がいいかも。」

「何で？」

「なんかあいついやらしい目であなたのこと見ていたから。」

「またまた。そんなことあるわけないでしょ！」

「あたしの話が信じられないの？姫娥からの伝言だったんだけど。」

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

「そんなこと言ってあたしをここから追い出そうとしているんでしょ！」

「違うわよ。そりゃ、あんたには出て行ってもらいたいけどさ。」

「ほーから見なさいよ。」

アイレーンは鈍い声を発して、唸った。そして、何かを思い出すと、こう言った。

「サンドリヨン！あたしの部屋の掃除をしなさい！」

「サンドリヨンじゃないわよ、ミントよ！」

「そうよね、あなたに王子様はやってこなかったものね。」

「来たわよ！みっくんの守護妖精は王子様だったんですもの〜！」

アイレーンは唇を噛んだ。

「でもあんたが未来人の守護妖精になったら、未来人の価値も落ちるわね。」

「そうだったんだ、それでレオ様はあたしを守護妖精にしようとしなかったのね？」

「え？」

「そういう理由だったら、みっくんの守護妖精はこのままでいいのかも。でもメイク・ラブを見られるのは恥ずかしいな〜。」

「め、メイク・ラブって…未来人とはどこまで行ったの？」

「なーいーしょ！」

ミントは、唇に人差し指を当てた。

アイレーンは当然のようにぶりっ子ができるミントが憎たらしくてたまらなかった。

「早くあたしの部屋を掃除しなさいっ！」

アイレーンは、ミントの長いピンク色の髪を引っ張った。

「いったく！掃除するわよ！するからいじめないで！」

アイレーンはそのまま瞬間移動でミントを部屋まで連れていった。

「いいっ？隅々まで掃除するのよ！ほこりがちよつと残っていてもダメだからね！」

「はいはいっ！やればいいんでしょ？」

ミントは6人に分裂した。

「僕がロマンで」

「あたしがキララちゃん！」

「自己紹介しなくてもいいのっ！」

アイレーンは怒って出て行ってしまった。それから廊下を歩きながら、ため息をついた。

「どうしたの？アイレーン。」

向こうから姫娥がやってきた。

「姫娥！聞いてよ。」

「話なら私の部屋で聞いわ。」

二人は、瞬間移動で姫娥の部屋へ飛んだ。

「姫娥、あたしミントを見ていると、どんどん意地悪になってきちゃう。どうしたらいいか分からない！」

「彼女に嫉妬しているのね、分かるわ、その気持ち。」

「あたしだって未来人のことが好きだったのに。…自分で言ってる気持ち悪いけど。でも唯一の大切な親友を失って辛いのに。」

「アイレーンは未来人と結婚したかったの？」

「そうは思わない。でも未来人が30歳になっても結婚できなかったら、あたしが結婚してあげようと思っていたの。」

「そう、でも家族はどう思うかしら？」

「フレッドは…パパは反対してる。ニコルは知らないけど、祝福してくれないかも。」

「そうね…私もあなたと未来人は結婚するべきじゃないと思うわ。」

「どうしてよ！あのミントとかいうぶりぶり女ならいいってどういうの？」

「いいえ。私が言いたいのは、すぐに結婚をする必要はないってことなの。未来人は人間だからもう結婚したわ、でもあなたは妖精なの。100歳未満の結婚は感心しないわ。あなたは最低でも100歳を越えるまで、いろいろな妖精と恋をしないさい。」

「いろいろな妖精って言ったって、ここには姫娥とレオニードしかないじゃない。レオニードはやばいでしょ？誰もいないじゃない。姫娥が相手になってくれるなら、話は別だけど。」

アイレーンは、姫娥を見た。姫娥は首をかしげた。

「私ならいつでも相手になるわ、でも、あなた自身はいいの？」

「いいよ…別に。どうせこの先誰かとSEXしたり、結婚する予定はないんだから。」

「分かったわ。」

二人は服を脱いだ。アイレーンの細い体に未発達な胸、まだピンク色の締りのいい、性器。そして姫娥の豊満な胸、官能的な体、全ての生命を生み出す子宮が向かい合う。アイレーンは姫娥の肉体を見て、息を飲んだ。そしてゆっくりと胸に触れ、谷間に顔を埋めた。あそこがきゅーっと痛くなって、おしっこを我慢するときのように、足をばたばたさせた。

アイレーンは姫娥の乳房をくわえると、音をたててすい始めた。『乳を飲む』という、はるか昔に失われた行為がよみがえる。アイレーンは顔を上げると、姫娥を見て笑った。

「さあ、横になって、わたしの赤ちゃん。」

姫娥はそっとアイレーンを横に倒し、陰唇にキスした。そして、まだ小さいひだを舌で動かし、刺激した。それから指でクリトリスを取り出し、くりくりまめまわした。

「あああ〜ん。」

アイレーンはあまりの気持ちよさに足がしびれてきた。

「姫娥、乳首は？」

アイレーンは起き上がり、叫んだ。

「分かったわ。今とっておきのおもちゃを出してあげる。」

そう言って姪は机の引き出しから箱を取り出し、その中からおもちゃと取り出し、アイレーンのわずかな乳首に洗濯バサミ状のものを取り付けた。そしてスイッチを入れて振動させた。

「ご、ごりごりしていて、ちょっと痛い。」

「我慢して。」

「姪はパステルグリーンのペニスそっくりなバイブに薬を塗ると、アイレーンの膣口に差し込んで、振動させた。

「ああああっ！姪、お願いだからやめてっっ！」

アイレーンが泣き叫ぶので、姪はバイブを抜いた。

しばらくの沈黙の後、アイレーンの鼻をすすする音が聞こえた。

「あたし、あの女以下なんだ。あの女はSEXができたけど、あたしはできない。」

「そんなことないわ。ごめんなさい。実は私女の子としたことがなかったのよ、だからあなたの喜ばせ方が分からなくて。」

姪は自分の乳首をアイレーンの乳首にこすりつけた。

「…そうなの？」

アイレーンは姪の胸に釘付けになり、思わず息を飲んだ。

「そうよ、だからこれはわたしがいけないだけなのよ。」

アイレーンはしばらく姪を見て決心したように言った。

「じゃあたしがまともにSEXできるようにして！」

「分かったわ。」

こうしてSEXは再開された。姪はアイレーンの乳首に塗るとスーッする無害の薬品を塗り、自分の指にも塗りたいくらい、それを彼女の膣口にいれ、出し入れさせた。アイレーンは、たわわに実って、ベッドに何度も垂れ下がる乳首を救い上げ、手でいじった。すると、彼女の乳首から、乳が飛び出し、それを見たアイレーンも恥液を出してしまった。

「いいわよ、アイレーン。」

姪がそう言うと、アイレーンはだんだん自信がもてるようになり、姪の入り口もしやぶりたいと言いだした。

「なら、シックス・ナインしましょうね。」

姪は笑いながら言った。

そして二人は69の字の形になって、お互いの性器をなめ回した。アイレーンは姪の豊満な胸を持ち上げ、自分の顔に挟みながら、姪の陰唇や、クリトリスをなめた。姪はアイレーンの体を撫で回し、体の肉を全部胸に持っていくかのように、両手を持っていった。

「姪、いますごくいい状態なんだけど。」



「そうね私もよ。」

姫娥は先ほどのパステルグリーンのバイブをアイレーンの中にいれ、振動させた上で、上下に動かした。ぐちゅぐちゅ。

「あっああぐぐぐっ！」

アイレーンは昇天してしまった。

再び目覚めた時、姫娥が自分でバイブを手に、オナニーをしていた。

「姫娥…ごねんね、一人で気持ちよくなって。」

「いいのよ、でも困ったわ。充電が切れてしまったみたいで、勢いが弱い。これじゃあイケないわ。」

アイレーンは、玩具が入っていた箱を開けると、さっきのパステルグリーンの他に、ピンクと水色と、イエローもあった。

アイレーンはグリーンが入ったままの膣に、ピンクと水色を差し込んだ。そしてもうひとつの穴に、イエローを挿入させて、振動させた。ヴイイイイ…ッ。

「あ、あ…ん。んんっ。——ッ！」

姫娥が足をバタバタさせた所為でバイブが抜け落ちた。アイレーンはバイブをなめてから、再び姫娥の中に差し込んだ。姫娥は汗まみれで、必死でシートにしがみついていた。アイレーンは何を思ったのか、横向きに横たわり、もだえている姫娥の腰の上に乗る、乳をもみ、しゃぶった。それからさっきの洗濯バサミ状のもので乳首をはさんで、振動で刺激させた。

「ううううん。」

「姫娥はしばらくのあいだもだえていたが、自らバイブを抜き出し、洗濯バサミもとり、アイレーンと共にお風呂に入った。」

「どうだったかしら？」

「すごかった。バイブが合計4本も入っちゃうなんて。」

「それだけ穴が開ききつているのよ。」

「またやりたいな。」

「そうね、私もいろいろ研究してみたいわ。もしかしたらもっと濡れる方法があるかもしれないわね。」

「あゝあ、ついに姫娥とやっちゃった。しかもアイレーンの姿で。スターリングの姿でもやってくれる？」

「レオニードにしかられて、おしおきされてしまうわ。」

「おしおきか、されてみたいな。」

その日から昼の間だけ姫娥とのSEXをするようになった。

胸が大きいということは美しいということ。

胸が小さいということは愛らしいということ。  
子宮は回りながら全ての生命を生み出し、  
乳は激しく揺れながら全ての生命を育む。  
したごごろを、君に。

「ねえミント、あたしの鍵知らない？」

アイレーンはミントを自分の部屋に呼び、机の中をあさり始めた。

「あたしは知らないわよ。」

「金色の小さな鍵なんだけど。」

「鍵は普通小さいの！」

「あたしよくその鍵をペンダントにして持ってたんだけど、気づいたらなかったの。」

「ああ、あの鍵ね。」

「知っているの？」

「どこにあるかは知らないな。」

「あれすごい重要な鍵なの。膝下くらいしかないサイズの扉がこの城のどこかにあるんだけど、そこを開けてはいけないっていわれているの。あんたも昔話で聞いたでしょ？その扉を開けるとんでもないことが起きるって。」

「なんで断らなかったの？」

「姫娥にうまいこと言われたに決まってるでしょ！どうしよう、あの鍵を使って誰かがあの扉の鍵を開けてしまったら、大変なんだけど。」

「で、アイレンちゃんはあのあたしにその鍵をさがしてもらいたいんだ。」

「大当たり。分かったつらさつさと行く！」

ミントはしぶしぶ鍵を探しにでかけた。

「大体アイレンちゃんはメイド服も似合うミントちゃんに嫉妬しすぎなのよね。何とかなんないのかしら。」

ミントは軽く空を飛んで木陰に入ると、眠くなったしまったので、寝てしまった。そして数分間だけ寝て、起きると、黒い物体がお腹の上に乗っていて、真ん中が光っていた。

「キヤ~~~~ッ！」

気を失いそうなミントに、物体はべろで顔をなめた。

「食べられる〜！」

「食べませんよ。」

黒い物体は人型になった。

「なんだとーま君か。どうしたの？」

「あなたがこれを探していたので、見つけてきたんです。」

「ありがとう、とーま君！」

「いえいえ、では私は仕事がありますので。」

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

「待つて！この鍵のことなんだけど、この鍵で開く、膝下くらいの扉について何か知ってる？」

「いいえ、私はそのことについては何も聞いていません。」

「そう。」

「お役に立てなくてすみません。」

トーマは、頭をさげた。

「いいのよ、とーま君が謝ることないんだから。」

「そうですか。では僕はこの辺で。」

「じゃあねー！」

ミントは彼に手を振った。

「彼は：大丈夫だよね？」

ミントは、プールサイドでくつろいでいる、暇人のアイレーンに鍵を差し出した。

「ありがとー、ちよつと早かったかな。」

「とーま君が探してくれたの。」

「ゲツ、あいつが？やばくない？」

「やばくない！」

アイレーンは渋々鍵を受け取った。

「ねえ、これからこの鍵で開く扉を見に行かない？」

「別に：いいけど。開けないですよ？そしてあたしを巻き込まないでね。」

「分かった分かった。」

こうして二人は出発した。

「ねえ、瞬間移動しないの？」

「そしたら楽しくないじゃん。やっぱ、城のどの辺にあるか、確認しなきゃ。」

「別にあたしには関係ない話なのよね。」

「着いたわよ！」

その扉は、他の扉同様、木でできてあったが、この白い城に似合わず、こげ茶色だった。

「なんか、開けてくれ〜って扉が言っているみたい。」

「そうでしょ？」

「あたしやっぱり、嫌。ここには近づかないわ！」

「待つてよ！あなたにお願いがあるの。この鍵をもっていてほしいの。」

「あたしが？嫌よ。爆弾もっているようなもんじゃない。」

「そこを何とか！もっている間はあるあなたも仕事をしなくていいから！」

「本当？」

「うん。一緒にプールで泳ぎましょうよ。」

「さんせー！」

こうしてアイレンとミントは一週間くらい、プールで寝そべっていた。が、アイレンは時々どこかへ行ってしまおうし、仕事がなくなって何もすることがないし、いつしかミントはここに来た目的を忘れてしまった。

アイレンが今日も姫娥の部屋で調教をしてもらいに行くと、部屋のなかに姫娥はいなく、代わりに六連がいた。

「ゲ、いつ来たの？」

「今だよ。お金がなくなったからもらいにきたんだ。」

「そういえば未来人が結婚したらしいよ？」

「そんな話聞いてないな。」

「じゃあ内緒で結婚したんだ。今未来人の彼女がプールのところでくつろいでいるんだけど、見に行く？」

「僕はかまわないよ。」

そして二人でプールへ行った。

「ちよつと、パンツ出てるわよ！」

「きゃーきゃーっ！」

ミントは急いでパンツを隠した。

「アイレンちゃん、その方はだあれ？」

「デスコルの守護妖精で、姫娥の息子なの。それで姫娥とはむふふ…」

「余計なことは言わなくていいよ。」

六連は機嫌悪そうに話を遮った。

「そうなの。あたしミントちゃん。よろしくね。」

「あんたは未来人と結婚したんでしょ？」

「そうよ？だから、レオ様をお願いして彼をもらいにきたの。」

「でもこの前たしか、未来人の価値が下がるなら、レオニードのままでもいいって言ったじゃん。」

「うーん、そうなんだけど、もう一回頼んでみたいんだ。それにレオ様の所為で失業したんだし。ねえスバルくん、あなたからもレオ様をお願いして？」

「スバルくん？」

「だってあなたスバルくんでしょ？」

「その名前には嫌な思い出があるんだけど。」

「だめなの？」

「だめじゃないさ。」

「やったー！じゃあスバルくんに決まり！」

「ねえスバルくん、みつくんは元気？」

「あまり元気そうには見えないかな。10日間の休みをもらったから、その分、10日間だけ仕事が倍になって、大変だったんだよ。」

「あらら。」

「それに最近お金に困っているらしくて、ヘリオトロップに借りたりしたらしいよ。」

「99パーセント以上あんたのせいね！」

「えくん、ごめんなさうい。」

「ねえ、こんなぶりぶりふにやふにや女が未来人の妻でいいの？」

「僕はいいと思うな。」

「何で！」

「かわいいから。」

「いやん、スバルくんたらっ！本当のこと言って！」

「スバルくんって言うと、イメージ変わらない？」

アイレーンは、ぼそつと言った。

「とにかく、あたしは反対！未来人はこの女に騙されているのよ！」

「騙されてみたいね、僕も。」

「あのねえ！」

アイレーンはため息をついた。そしてふと何かを思いついた。

「そうだ。ねえ六連、この女とSEXしたいと思わない？」

それを聞くと、ミントはその場で飛びはね、

「きゃーきゃーっ！」

と叫んだ。見るからに嫌がっていた。

「どうしてそんな話を僕にもちかけるのかな？」

「六連はそういうの好きじゃん。母親とやったり、自分の子供とやったり、人妻とやったり。誰も相手がいなかったら純愛禁止区域でするんでしょ？」

「まあそれは一理あるけどね。」

「あたしはやらないわよ！」

ミントは叫んだ。

「嫌がる彼女を無理矢理押し倒すっていうのはちよつと。」

「何言ってるの？大声で泣き叫ぶこの女をレイプしたいと思わないの？」

「それはまた別の機会にさせてもらおうよ。」

「あたしはやらないのっ！」

「それより、どうしたの？今までそんな話をしたことはなかったのに。」

「ここに来て変わったの。」

アイレーンはため息をついた。

「アイレーンが変な話を持ちかけて悪かったね。」

「うん、冗談なら別にいいよ。」

「あなたがち冗談でもないんだけどね。」

「え？」

「じゃあ僕は用があるから、この辺で帰るよ。」

と、言いつつ、六連は姮娥の部屋の方へ行った。アイレーンもすぐ後を追った。

「まあ、どこに行っていたの？」

「ちよつとね。」

「あの女をナンパしていたのよ。」

「していないよ。」

「でもあの女が可愛いとか、言った。」

「まあ、大変だわ。でも私思ったのよ、もしレオニードが彼女のことを好きになっ  
たらどうしましょう。」

「放っておけばいいじゃないか。」

六連は嘲笑った。

「重婚はだめよ。それに人間と結婚した者は、1000年は結婚しちやいけないことにな  
っているのよ。」

「あいつ知らないよ、それ。」

「それは君も同じはずだ。」

「ところで、話があるから残ってって言われたけど、何？」

「ミントちゃんのことなの。私早くあの子をここから出したいのよ。」

「どうして。」

「あの子がレオニードを無意識のうちに誘惑しているんじゃないかって思って。」

「誘惑に乗ったのは、トーマだけだね。」

「それに早いところ未来人のもとに返したいのよ。」

「それで僕に相談？」

「ええ。」

「そんなの六連があいつをレイプすればすむことじゃん。」

「またそれか。」

「あなたがレイプするのは、ミントじゃないわ、アイレーンよ。」

「うっそ！」

アイレーンは飛び上がった。

「何の冗談？」

「つまりこういうことよ。六連が泣き叫ぶアイレーンを追いかけ、ミントの前でレイプする。それで次はミントを襲おうとする。そしてミントは必死でこの城から逃げて、めでたしめでたし。」

「めでたくないって。」

「そんなにうまくいくかな。それにアイレーンも僕とSEXしたくないでしょ？」

「……」

「アイレーン、あなた言っていたじゃない、本物のペニスを入れたいって。」

「だったらマルメロをここに連れてきてやればいいじゃん。」

「そしたら、スターリングに戻っちゃうでしょ！」

「でも僕とはしたくないよね。」

「したい。」

「え？」

「誰でもいいからオスとしたい。それにレイプは嫌いな男とやった方が濡れると思う。」

「……」

こうして、『レイプでミントを追い出せ！』作戦は実行された。

「きや～～～～！！」

甲高い声が玉宮中に響きわたった。アイレーンは奇声を発しながら中庭に面した廊下を走った。

「ちよつと煩いよ！」

六連はアイレーンを追いかけた。

「ほらっ！捕まえちゃうよ！」

「まだ早いって。ミントがいるプールまで走らなきゃ。」

「誰か助けてっっ……誰か！だれかっっ……ああん、ゴーカンマンに襲われちゃう！」

「余計なことは言わなくていいから！」

六連は怒鳴った。

「いやあ～～～～っ！ゴーカンマンよ！チンポマンよ！レイプ魔よ！おまけに近親相姦の常習犯よ！」

アイレーンの聞いていて恥ずかしい叫び声に、六連は嫌々彼女を追いかけたが、本気でレイプすることに決めた。

「どうしたの？」

角からミントが飛び出してきて、アイレーンはミントとぶつかりそうになった。

が、その時、六連はアイレーンの胴体に鞭を巻きつけ、自分のほうにたぐりよせた。

「え？どうなっているの？」

アイレーンと衝突すると思い、両手で目隠しをしていたが、何ともないので、ゆっくり

目を開けると、六連が必死で抵抗するアイレーンの服を剥いでいた。

「きやあ〜〜〜っ！」

ミントは再び手で目を隠したが、指と指とのすき間から、アイレーンが六連にレイプされているところを見ていた。

「す、スバルくん。やめてよ。」

ミントはか細い声で言ったが、六連は無反応で、餌を食らっていた。

アイレーンの両手を背中できつく縛り、あそこを天井に向け、陰唇をすばやくなめていた。

「やめてよ、六連！もういいからやめて。」

「六連じゃない。ゴーカンマンだ。」

そういうと六連は、全裸になった。

「きやあああああ〜〜〜っ！」

ミントは叫んだ。短いスカートから出たか細い足が恐怖で小刻みに震えていた。

六連はアイレーンの両足首を持ち、自分の膝のところまで倒すと、適当に陰唇にペニスを当てた。そのままペニスを両足ではさみ、自分のペニスが挟まれた彼女の両足を自分の両足で挟んだ。その状態でアイレーンの腰を持ち上げ、上半身を起こし、彼女の体を『く』の字に曲げた。そしてクンニリングスした後の唇で彼女の唇に濃厚なキスをした。ここで彼女の両腕を縛っていた鞭が外れた。六連が彼女の乳首をなめ回すと、アイレーンは両腕を六連の首の裏に回した。六連は彼女のお尻に手を当て、押さえると、腰を動かし、陰唇をペニスで刺激した。

「あああん！」

アイレーンの悲鳴はやがて淫乱な声に変わっていった。

「どうなっているの？」

ミントは、足をXの字にして、困っていた。

「アイレンちゃん！何で何もしないのよ！スバルくん、やめてよ！」

だが、ミントの声は二人には届かなかった。

アイレーンの足が床に着くと、アイレーンは片足を上げ、六連の体によじ登ろうとした。

そして六連は彼女の太ももを持ち上げ、挿入した。六連は両手でアイレーンの足場をつくってやり、アイレーンはその足を乗せて、おもいつき腰を動かした。

「うそよ。本当にレイプなの？ねえ！ひどい…。」

ミントはたまたまなく惨めな気持ちになった。未来人と結婚してすぐに、ここに来て、もう10日以上たっている。本当なら、未来人とこのようなSEXをしているのは自分なのに、ここにはそれがかなわない。

レオニードに見られたくなかったのは、未来人とのSEXではなく、失敗ばかりしている、自分の馬鹿で間抜けな姿だった。白天使学校を休学しているのも授業についていけない



かったからだ。自分はレオニードに、未来人の妻としてどんなに無能かということ、指摘され、非難されたくなかったのだ。どうしてそれを六連とアイレーンがSEXしている前で考えてしまうのだろうか。

ミントは堪えきれなくなつて走り出した。

「六連！ミントが逃げたよ？」

「わ、わかった。」

六連は腰がピクッと動いたと思うと、精射した。そしてペニスからザーメンを拭くと、アイレーンの口の中に押し込んだ。

「ウグ。」

「今日から君も肉奴隷だ。」

六連はそう言うと、ズボンをはき、ブラウスを着ながらミントを追いかけた。

アイレーンはザーメンを飲み込んだ。

「肉奴隷か…。」

そして、恍惚となりながら、指で秘部をまさぐり始めた。

「きゃあ〜〜〜っ！ついて来ないで〜〜〜！」

ミントはシャツの肌けた六連に追いかけられていた。

「だめだ、秘密を知ったからには、レイプさせてもらう！」

「いやや〜〜〜っ！こうなったら、分裂よ！」

ミントはロマンとキララに分裂し、ロマンは宙に浮かび、キララはそのまま走った。

「しまった！分裂した後のことを考えなかった！」

六連はキララだけを追った。

「きゃあ〜〜〜っ！ついて来ないで〜〜〜！誰か〜！誰か助けて〜っ！」

キララは大声で助けを呼んだ。

だが、誰も助けてはくれず、ついにキララは足首に鞭を巻きつかれて、転んでしまった。

六連はキララの手足を縛ると、肩に担いで運び出した。

「誰か〜！誰かいないの〜！ゴーカーマンに誘拐されちゃうよ〜！お願い、誰でもいいから助けて！」

「叫んでもむだだよ。僕は君を犯す。それが嫌だったらここを出て行くんだね。」

「出て行くわ！出て行くから放して！」

「じゃあ君のもう一人をここに呼んで。」

まもなく、ロマンが姿を現した。レオニードと共に。

「厄介な奴が現れたな。」

六連は唇をかんだ。

「これはどういうことですか？」

「別に。」

「スバルくんがアイレンちゃんをレイプして、あたしも襲おうとしたの！」

「ミントはもとの姿に戻って言った。」

「でもよかった、レオ様が助けに来てくれて。もう少しで犯されることだったよ〜っ。」

「ミントはレオニードに抱きつき、泣きながら顔を摺り寄せた。」

「何故レイプをしたのか、理由を言いなさい。」

「アイレンのはレイプじゃない。レイプというシチュエーションの中でSEXを行ったに過ぎない。それでミントを追いかけたのは、そのままここから出て行ってもらったためだよ。」

「が〜ん。ひどいよ、スバルくん。」

「それでもあなたの行為は許されるものではありません。」

「あっそう。でもこれは僕が計画した事件じゃないんだよ。考え出したのはあくまで他の妖精でね、ここに住むある妖精の所為なんだ。今ミントに抱きつかれている君を嫉妬深そうな目で見ているある妖精のね。」

レオニードが後ろを向くと、姫娥が立っていた。

「母上！」

「ごめんなさい、レオニード。全部私が仕組んだことなのよ。」

「どうしてですか？」

「未来人の守護妖精であるあなたが、未来人の妻になったミントに恋愛感情をもつことを恐れて、彼女をここから追い出そうとしたのよ。」

「ひっひど〜い！姫娥様はとってもいい方だと思っていたのに〜！」

ミントは、そう叫ぶと走り去ってしまった。

「信じられない！何もかも。誰もかもが信じられない。なんでもつと普通に追い出してくれないの？あたしが何年もここに住みつくわけがないのに！そりゃあみつくんはあたしのことが好きだけど、レオ様は絶対あたしに失望している。分かるもん。困った顔であたしを見て！」

ミントはしばらく走っていたが、廊下の真ん中で金色の鍵が落ちているのが見えた。

「これは…。」

開けてはならない扉の鍵だった。

「分裂した時に落としたんだわ。そういえばあの扉ってどこにあったっけ？」

ミントは周囲を見回した。

「ここではないよね？」

と思いつつも、足元に視線を落とした。

「きゃくくくっ！」

ミントはその場で飛び上がって足踏みした。あつたのだ、あのこげ茶色の扉が。ミントは恐る恐るしゃがんで鍵穴から中を覗いた。すると、中には未来人が病院のベッドで寝ている姿が見えた。

「ど、どうなっているの？なんでみつくくんが病院で寝ているのよ。何がどうなっているの？」

ミントは汗ばむ手で、夢中で鍵を開け、小さな扉を開け、中を覗きこんだ。しかし、中は真っ暗で、なにも見えなかった。

「ひっかかったな。」

不気味な声があると、一瞬のうちに、扉の中に吸い込まれてしまった。

「きゃくくくっっ！」

扉のなかに引きずりこまれるなり、急な滑り台によって、地下にある独房に運ばれた。

暗くてじめじめした牢屋の中で、膝を抱えながらしくしく泣いていると、扉の向こうから足音が聞こえ、鍵を開ける音が聞こえた。そして中に誰かが入ってきた。

「誰？」

黒い服を着た誰かは、何も言わずに独房の鍵をかけた。

「ねえ、誰なの？」

黒い誰かは近づいてきた。そして、顔と耳が見えた。

「とーま君！」

ミントは元気よく立ち上がって言った。

「助けに来てくれたのね！ありがとう。」

だが、とーまは重苦しいため息を吐き出した。

「困りましたね。」

「どうかしたの？」

「はい。あなたがここに来たということ、あの扉を開けてしまったということですね？」

「そ、そうだけど。仕方ないじゃない。鍵穴からみつくくんが病院で寝ている姿が見えて心配だったんだし。それに禁止は破るためにあるんじゃないの？『開けてはいけない扉』をあけなきゃ、物語は進まないのよ！いつまでたってもこのお城から外の世界に出れないでしょ、だから開けたの。」

「あなたは、そうやって自分を正当化しているみたいですけど、あなたは自分の立場が分かっているのですか？」

「とーま君、こわくわい！」

「ごめんね、ミントちゃん。あなたとはもっと仲良くなりたかった。でもここに来てしまったからには、逃げられませんよ。そして僕はレオニードさんからあなたを罰するよう、言い付かったのです。」

「ちょ、ちよっと！レオ様がみっくんの妻のミントちゃんにそんなひどい事するわけないじゃない！」

「そりゃレオニードさんはそんなことはしませんよ。自分の手は汚さない方ですからね。だからこの僕が——レオ様に代わって、お置きよ。」

「変な冗談はやめてよ、とーま君。」

「冗談に聞こえますか？」

「うん。」

「本気ですよ？」

トーマは、力強く、足を一步前に踏み出し、鞭を取り出し、電源をオンにした。すると鞭は光りだし、鞭を床に叩きつけると、火花が散った。」

「きゃくくくく！お願い、痛いのはやめてー！何でもするから！」

「何でもするから？」

「うん。だからその鞭は使わないで！」

トーマはしばらく彼の前で手を合わせる、哀れなミントをみつめていたが、何を思ったか、鞭を捨てた。

「ありがとう、とーま君。」

「誤解しないでください。あなたへの体罰は終わっていませんよ。」

「ほえ？」

「本当ならさっきの鞭であなたを叩きのめしたいところですが、これで許しましょう。」

そう言うなり、トーマはズボンのチャックを下ろし、すでに堅くなっているペニスを取り出した。

「これをくわえなさい。」

「いやああああっ！」

地下室を、悲痛な叫びが響き渡った。

トーマは嫌がるミントの口にむりやり挿入させ、押し込んだ。

「イテッ！」

ミントが思いっきりトーマのペニスをかんだので、トーマはペニスを取り出すと、ミントの頭を叩いた。

「おとなしくしゃぶらないと、こうだぞ！」

トーマは再びミントの口を開けようとしたが、ミントは歯を食いしばって、開けなかった。トーマは舌打ちをすると、ミントを押し倒して、洋服を剥いだ。そして彼女の手を天井につるし、体を十分に管め回してから挿入させた。

と、その時、ミントの体が光ったと思うと、一瞬のうちに分裂してしまった。

「お前、やってはいけないことをしたな！」

気分を害されたトーマはすばやく鞭を拾い上げ、電源をオンにした。

「分裂した奴には、これだ——っ！」

トーマはロマンもキララも滅多打ちにして、彼らに反省する時間も与えずに連打した。

10分もしないうちに二人は地面に倒れ、動かなくなった。

「やっとな静かになった。」

トーマはゆっくりと息を吐き出すと、ロマンとキララが全裸になっっていることを確認して、ロマンのペニスをキララの中に入れた。すると、二人は融合し、ミニトとなった。トーマはそつとミニトの唇にキスしてから、ペニスをミニトの口の中に入れ、尿を出すと、っこり笑って下の方の口に移った。そしてペニスを挿入させ、十分にピストン運動すると、精射した。いったん取り出したものの、何か足りないような気がして彼女の体を起こした。彼女の口から尿がこぼれ落ちた。そして、またペニスを挿入させると、胸をつかみながら体を動かし、まもなく、精射した。それから一息ついた後、彼女を馬のように置き、自分は犬になり、彼女の後ろから毛に覆われたペニスを入れた。そして精射した後、アナルにも入れてみた。何度ミニトの穴場めぐりを堪能したか忘れたが、それがすむと、トーマは彼女をそのまま寝かせ、鞭を手に行ってしまった。

## 第22節 君がいない

借金をしてまで行った『カップルで行くラブラブ10日間の旅』で見事ミニトと恋人同士になった僕は、同時にプロポーズされ、あまりの展開の速さに戸惑いながらも、彼女と結婚を約束し、即座に登録してしまった。時間がたつにつれ、あの花の香りと、透きとおった肌と、甘い声が現実のものとして手に入る実感がわいてきた。そして結婚式の招待状を月影に渡し、彼がどんな顔をするか、想像した。そして自分より6歳も年上の彼よりも先に子供が誕生し、彼がどんな顔をするのか、思い浮かべた。旅から帰った日の夜は、わくわくして眠れなかった。僕は生まれて初めて輝いている！

次の日は朝早く起き、まぼろし山へ飛んだ。飛行船の中、僕は天国に上る気分であつたりとしていた。そして半日の仕事でも、背中に羽が生えているかのように無重力で、軽く、ふわふわ浮いていた。そしてまたたく間に労働時間は終り、僕は彼女の待つ喫茶店に行った。彼女とは特に次に会う場所は指定していなく、彼女が毎日仕事をしているとは言い切れなかったが、きっといるだろうと信じていた。

ドアを開け、鈴が鳴り、一番隅のお花畑の写真が飾ってあるテーブルに座れば、ミニトがやってきてくれる。僕は彼女の手をつかみ、

「紅茶を一杯。お持ち帰りでミニトを。」

「と言う。こんな恥ずかしいことを平気で言ってしまうのか？と笑われるかもしれないが、フェアリーランドではよくある光景らしい。本当かな。」

僕は勢いよくドアを開け、例のテーブルへと、突進した。が、そこにはすでに先客がい

た。僕は少々落ち込んだものの、近くの席に座った。

まもなくウエイトレスがやってきた。が、ミントではなかった。ほんとうについていない。紅茶も今までとは違う味がして、物足りなかった。

重い足取りで家に帰ると、適当に食べて、そのままベッドに寝込んでしまった。ヘリオトロープが回復魔法をかけてくれたが、元気になっても僕はベッドから起きなかったし、彼女の問いかけに、おならで返事をしたので、怒られてしまった。そしてろくに謝りもせずに、眠ってしまった。

次の日、気を取り直して、仕事に打ち込んだ。もう昨日ほど浮ついてはいなかった。通常の倍も仕事をする10日間は辛い、きつとそれなりの報酬が後で待ち受けているのだと思った。早起しななければならないので、余り寄り道はできなかったが、今日もミントの店に寄った。結果はハズレだった。僕は紅茶を一气飲みして、店を後にした。

3日目には体が重かったが、月影が馬に乗り、掛け声をかけながら走っている音で目が覚めた。何で朝から馬に乗るのだろう。しかも自分の妻なのに。僕はゴミ箱をおもいつき蹴り上げてから、出かけた。仕事はだるく、左足を手押し車に乗せ、右足で車を押ししていたら、何の動物か分からない耳がついた、自分より階級の上の職員に、軽く叱られてしまった。3日連続でミントが仕事を休んだことはなかった、今日は絶対に会えると確信していた。そしていつもの席に座ると、ウエイトレスがやってきた。が、ミントではなかった。

「えええっ！」

その場で立ち上がってしまった。周りの客が驚いて僕を見た。

「おっお客さん、どうかしましたか？」

「ミントは？」

「え？何ですか？」

「ミント・メリーリングっていうウエイトレスが3日連続でいないんですけど、どうかしたんですか？」

僕はスタッフ専用の部屋に案内された。

「彼女なら首になったよ。」

と、言われるために。

「どうしてですか？」

「休みすぎて。10日間の長期休暇は減給にしておいたけど、彼女あれから一回も店に顔を出さなくてね、しょうがないから首にしたんだよ。」

店長らしき、男は言った。

「そ、そうですか。」

「ところで君、彼女に会う予定ある？」

「あると思う。…思います。」

「あっそう、じゃあ彼女のロッカーの中の荷物全部出して持って帰ってくれる？」

僕は店長の声と、言い方が妙に痛に障ったが、おとなしく彼女の荷物をカバンに入れ、家に持ち帰った。そしてベッドの脇に置いた。

彼女は一体どうしてしまったのだろうか？もつといい仕事を見つけて、日夜働いて、僕に連絡する時間もないのだろうか？こう言っては失礼だが、彼女は男性依存症で、自分ではがんばらない女の子である。だから無理はしてはいけないと思うのだが。仕事に半日を費やしてさえないければ、彼女の家まで行って、両親に理由を聞くのに。そういえば僕は彼女の家の住所も覚えていなかった。彼女と肉体関係に陥ったのは、ごく最近のはずなのに、今まで僕は何をしていたのだろうか？

9日目にもなると、彼女のことを考え、悩み、体も疲れ果てていた。ベッドに突っ伏したまま、寝返りもうてなかった。ヘリオトロープが元気にしてくれたが、元気になったという実感がなく、体の痛みは取れなかった。

「未来人は最近どうしちゃったんだろう。」

未来人以外の家族のメンバーは、机に座り、家族会議を始めた。

「あの旅行から帰ってからおかしくなったのよね。」

「例の恋人と行くツアー旅行？」

「お前は未来人の恋人が誰か知っているのか？」

デスコルはヘリオトロープを見た。

「もしかして、俺の知り合い？」

「その通り、あのミント・メリーリングよ。」

それを聞くと、月影は軽く息を漏らし、体を後ろに反らした。

「あいつ俺への復讐のつもりで、未来人に近づいたのかな？」

「だから早く彼女とは別れるって言ったでしょ？」

エフィールは月影をにらみつけた。

「じゃあ未来人はその女に散々遊ばれて、捨てられたのか？」

「残念ながら、未来人は口を硬く閉ざしており、そう決め付けるにはまだ早いもよう。」

「あのね、月影。未来人はもともとそんなおしゃべりじゃない気がするの。特にあんたは口をきいていないでしょ？」

「痛いことを言うな。」

「この場でこんなものを見せるのはどうかと思うけど、未来人の部屋で見つけたのよ。」

ヘリオトロープは、ピンク色のパイプを取り出した。ピンクが大好きなミントが使ったのは、明らかだった。

一家を、だんまりが襲った。

10日目。今日でこの重労働もおしまいだ。今日は根性で乗り切った。そして、明日は久しぶりに仕事を休むことになったので、今夜ミントの家に行った。メルヘンの国に着いた方がいいが、どれもケーキかパフェの形をした似たような家ばかりで、1時間くらい路頭に迷っていた。そして不審者と間違われて、捕まりそうになった。が、理由を説明したところ、無事ミントの家に送り届けてもらった。

「こんばんは、おかあさん。」

「お姉さんでしょ？」

「こんばんは、ローズマリー姉さん、セーラ姉さん。」

妖精は、たとえ親子でも、『お兄さん』『お姉さん』扱いすることがある。たとえばニコルは、自分の育ての親のフロールを、『おにいちゃん』と呼んだりするが、決して『お父さん』とは呼ばなかった。老けることがない妖精ならではの、決まりである。

「みっくん久しぶりっ！どう、ミントの様子は？」

「あの子わがままだから、みっくん大変でしょう？」

「あ、あの…あれから彼女とは会ってなくて。どうしたのかなと思いつつも仕事が忙しくてどうすることもできなかったんですけど、いないんですか？彼女。」

「え？みっくんの家で夫婦生活をエンジョイしているんじゃないかなかったの？」

僕が頷くと、彼女たちは悲鳴を上げた。

「しかも、ウエイトレスも首になっちゃって。」

「それは普通かもしれない。」

「え？」

「でも10日も消えるなんて、約150歳の妖精のすることじゃないわね。」

「150歳？人間はそんなに生きられないけども。」

「とにかく！あの馬鹿ちゃんがいなくなるなんて、危険なことに巻き込まれている可能性が高いわ。」

「馬鹿ちゃんって…。」

「ちよっとみっくん、つつこんでないで真剣に考えなさいよ！ミントがどこに行っただか、心当たりはないの？」

「そう言われても…めちやくちやミントだからな。」

僕はセーラに軽く頭を叩かれた。

「ああ、そう言えば僕の守護妖精に会いたいか何とかいっていたかな。」

「それだー！よく思い出した！ミントはそこで監禁されているに違いないわ、そして、ロボロになった彼女をみっくんが助けだして、めでたし、めでたし。」

「監禁されているかどうかはわからないけど、みっくんの守護妖精のところにいる可能性は高いわね！ねえ、みっくんの守護妖精はどこに住んでいるの？」

「玉宮。」

「へへ、そこで働く使用人か。」



ローズマリーは頷いた。

「いいや、僕の守護妖精はその主のレオニードです。」

「ま、マジ？」

「マジ。」

「きゃくくくっ！レオ様よ！みっくんの守護妖精はレオ様よ！」

「何？そのレオ様って…。」

「すごい、みっくん。月影なんか目じゃないわね。」

「そう？」

「じゃあミントもレオ様のお城で歓迎されて、時を忘れているのかもしれないわ。」

「忘れすぎだと思う。迎えにいった方がいいかな？でも明日はずっと寝ていたいし、しばらく休みはないんだけど。」

「迎えにいかなくても、そのうち帰ってくるわよ！」

「はあ？」

「だってレオ様でしょ？」

「留守だったらどーするの。怖いレイプ魔がいるかも。」

「何か言った？」

「いいえ。」

「とにかく、あの子を信じて、待っていてあげて？これは恋の試練よ。」

「一ヶ月以上は待てないけどね。」

僕はまたセーラに頭を叩かれた。

### 第23節 罪人の証

ミントが再び目を開けると、目の前に姫娥と、アイレーンと、六連とレオニードと、そして何故か口を塞がれ、逆さに宙吊りになっているトーマがいた。

「ああーっ！痴漢者トーマス！」

ミントはトーマを見るなり、叫び声をあげた。

「よかったわ、目が覚めてくれて。」

「痴漢者トーマスって何？」

アイレーンは言った。

「こんなことになってしまって、ごめんなさいね。あの扉のことは、ほんの冗談だったのよ。冗談じゃない扉っていうのも存在するけど…。別にアイレーンを追いつもりはなかったけど、あまりにも暇だったから、ちよつとね…」

「ストープ！」

ミントが姫娥の話を遮った。

「ちよつとそれだけ？冗談じゃ済まされないのよ！このこと未来人に知られたらどうするの？」

「未来人にはいずれ知られると思うので、私の方から伝えておきましょう。」

「きやうくつ！やめてくつくつ！」

「それがそうもいかないのですよ。」

「ミントは奇声を発しながら、泣いたが、レオニードは、聞き入れてくれなかった。」

「ちよつと聞いてよ！あたしみつくんに『絶対他の女とSEXしないでね』ってお願いしたのに、こつちが破つてどうするのよ！それじゃあ『一度くらいならいいわよ』って言うているようなもんじゃない！」

「彼に許してもらつて、再度約束するしかないですね。」

「そんなら。慰謝料払え。あととーま君のチンポを切り落としてよ！」

それを聞くと、とーまは暴れた。

「特にそのような制裁を加えなくてもいいでしょう。」

「何でっ！」

レオニードは、黙つて吊るされているとーまを下に下ろした。そして、自由に話せるようにした。

「レオニードさん、僕を首にしないでください！」

とーまは土下座し、そう叫んだ。

「あんたなんか首よ！」

ミントは叫んだ。

「あなたも首ですけどね。」

そう、レオニードに言われてしまい、ミントは奇声を発した。

「で、でもレオ様のせいで失業したんだよ？責任取つてよ！慰謝料は？」

だが、レオニードは、とーまの前に腰をおろし、彼の相手をしていた。

「レオニードさん、二度とこんなことはしませんから、お願いします！」

「今思えば、彼女が私たちの目の前に現れて、しゃがんだ時から、あなたの目は彼女に釘付けだったのですね。」

「むつつりスケべめ。」

六連は彼に聞こえないように言った。

「ここに顎を乗せなさい。」

レオニードは片膝を立てた状態ですわり、膝を叩いて、合図した。

「はい…。」

とーまの鼻は真っ赤で、泣きそうな目をしてして、耳は哀れに垂れ下がり、尻尾は股の間に丸め込まれていた。彼は恐怖で全身を震わせながらも、やつこのことで顎を膝の上に乗せた。

とーまは黒い髪を真ん中からきれいに分けており、一筋の線が見えた。レオニードは、バリカンを手になると、彼の額から刃を入れて、分け目に沿つて、櫛を入れた。刃は額か

ら耳の間を通り、後頭部を駆け抜け、首の前で止まった。

トーマの黒髪は、ばつさりと落ちた。剃り跡は、分け目にしては目立ちすぎた。

「れ、レオニードさん？何がどうなったのですか？」

レオニードは黙って彼に鏡を渡した。そして絶叫したトーマにこう言った。

「あなたはこれから100年間、この髪型でいてください。月に一度、髪を剃りにここへ来るように。また、あなたの給料を100年の間3分の1に減らします。そして、後の3分の1はミントに、残る3分の1は未来人に支払うことにします。」

「やったく！」

ミントはベッドの上でスタンディングオベーションを始めた。

「あの、レオニードさん？僕は首になっていないのでしょうか？」

「私はあなたを首にするつもりはありませんよ？」

「へ？」

「誰にでも間違いはあるって言うじゃないですか。なので私はあなたを許し、今まで通り私の元で働かせます。」

「すばらしいわ、レオニード。」

「どーせ点数かせぎだろ？」

「きつと世間にもれちゃいけない秘密をトーマに握られているんだよ。」

賛否両論だった。

「この髪型であなたの傍に？レオニードさん、うれしくないんですけど。」

「私もそう思います。でも罪は償ってもらわなければなりませんからね。」

トーマは再び泣いた。

「さて、あなたもそろそろベッドの上で踊るのをやめてください。埃が舞うので。」

ミントは飛び跳ねるのをやめ、ベッドの上で正座した。

「トーマ君の3分の1の給料どうもありがとうございます！」

ミントはお辞儀をした。

「あなたの今後なのですが、しばらく働くのはやめて、白天使学校へ復学してください。調べにより、あなたの休学の原因が金銭的理由によるものだという事が分かりました。そこで、私は白天使学校の授業料を全額負担して、あなたを援助しましょう。もちろん後で返済してもらいますけどね。」

「ちよつと待って。あたしの休学理由は、授業についていけなくて、『この仕事は向いていないのかも』って痛感したからであって、また通いだすっていうのはちよつと。それに白天使を目指した理由も『あたしもなるみちゃんみたいな服を着てホワイト・エンジェルやりたいから』であって、無理ならコスプレでいっかかって、思うの。大体あたしなんかが実際に病院で働いて、医療ミスなんかしたら、大変だし。」

「黙りなさい。」

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

「ひよえええええ。」

「ミントは縮こまった。」

「あなたに確実に白天使になってもらうために、私が家庭教師を用意しましょう。授業料は支払える時でかまいません。その代わりに、あなたには10年以内に正式な白天使になつてもらいます。」

「でも、それまでに子供が生まれちゃうかもだし、守護妖精がレオ様のままだったら、3年以内に子供が生まれちゃって、きゃっほーってなことになるそうだし、学校通いながら子育てって、荷が重いなって思うの。」

「それを考えた上で10年に設定したのです。」

「そ、そうなの？」

「あなたが本気になれば、3年以内に白天使になれますよ。」

「いや〜ん、買いかぶりすぎ。」

「実際にはその逆ですけどね。私があなたを信頼できていれば、あなたに未来人の守護妖精をおまかせしてもよかったです。」

「しようがないわ、あなたよりすばらしい妖精はいないもの。」

「姫娥はそう言ったが、他の者は首を横に振っていた。」

「あたしがみっくんの守護妖精になれないことは、よく分かったわ。でも彼と結婚する資格がないわけじゃないよね？」

「その点は何ともいえませんが、未来人の現在の心境を唯一知る者としては……。あなたはもつと考えて行動するべきです。それと限られた時間を有効に使ってください。あなたの10日と、彼の10日では、時の感じ方が違うのですから。」

「もう結婚してしまったのですから、早く彼の元に戻るべきなのではないですか？」

「あたしも今帰ろうと思っていたところだったの。」

「そういえば未来人は今さつき事故に遭って、病院に運ばれましたよ。」

「えっ！どこの病院？」

「中央病院です。」

「そ、そんなに重症なの？」

「いいえ、中央図書館と、病院が隣接していただけです。」

「ねえ、瞬間移動してもいい？」

「瞬間移動禁止区域なので、ワープゲートを使ってください。」

「ミントは電話ボックス兼、ワープゲートに入り、中央病院の電話番号を押した。アイレインも入ってきた。そして、誰も電話に出ないことを確認すると、玉宮の電話ボックスから、中央病院の電話ボックスにワープした。」

「あの子たち、行ってしまったわ。」

「アイレーンはすぐ戻ってくるよ。」

レオニードは、六連をにらむように見たが、六連は目を逸らせた。

「でもうらやましいわ。」

「誰がです？」

「ミントちゃんよ。今はまだ幼虫かもしれないけど、そのうちきつと蝶になるわ。」

「その時は僕が採集しなきゃ。」

「六連。髪型を変えてみたいとは、思いませんか？」

「思いません。」

そして六連は再び目を逸らせたのだった。

## 第24節 金太、守って！

未来人は鍵穴から見た通り、病院のベッドで寝ていた。

「ねえ、未来人どうしたの？」

「しらなくい。このまま起きなかつたら、どうしよう。」

「えっ！あんたが戻らないから、自殺をはかったんじゃないの？」

「そーなのかな。人間って妖精より回復力が弱いから、医者もお手上げだったりするのよね。」

「あんたさ、回復させる術とか心得ていないの？」

「蘇生っぽいことができるけど、唯一知っている方法が、すっごく恥ずかしいのよね。」

もうどうしよう。」

「やるしかないでしょ？」

「そ、そうだけど。アイレンちゃんの前で？」

「あんたは六連に犯せられていたの見たんでしょ？あれほど恥ずかしいことなんて、滅多にないわよ。」

「そうかな。」

「早くやんなさ〜い！」

アイレーンはミントの額をぺしっと叩いた。

「んじゃ、ミント、いつきま〜す！」

と、叫ぶなり、ミントは未来人の上に乗る、彼のズボンとパンツを下ろし、自分のパンツを下ろすと、彼の元気のない凸を、自分の凹にはめた。

アイレーン、啞然。

そして、上半身を後ろに反らすと、額が金色に光り、光はどんどん大きくなり、輝きを増していった。そして合体した性器を通じて、力を未来人に注ぎ込んだ。

「これが、蘇生？未来人は起きないよ？」

「今から起こすから。」

ミントは彼の腰を手で押さえると、腰をすばやく上下に動かし、激しくピストン運動を

始めた。すると、未来人の指がピクッと動き、ピクピクッと動き、ついでに足も動き、目を開けた。

「ここは？」

「病院の中よ？よく分からないけど、みっくんがここに運ばれたって聞いて、急いで飛んできたの。」

「ミント！…アイレーンまで。」

未来人は意識がはっきりしていくうちに、顔が赤くなった。

「ミント、な、何をやっているのかな？」

「何ってみっくんが重症だって聞いたから、元気にしようと思って。ほら、おちんちんがんばれ〜ってね。」

「がんばれじゃない！アイレーンがいる前で、恥ずかしいんだよ。」

「でも、もう全部見ちゃった。」

アイレーンはVサインを送った。

未来人が、『やめて』と言っているのに、ミントは、秘部をこすり続けた。未来人は、汗をかき始め、手でシーツをつかみながら、必死に耐えていた。

足がびくびくと動いたかと思うと、未来人が叫びだした。

「で、でる〜！」

「早く出して〜！」

「そうじゃなくて、おしっこの方。早くどいて！」

ミントはそれを聞くと、すばやく彼の上から降りた。

「み、未来人のチンポが立ってる。しかも毛がついているし。」

アイレーンは顔を近づけて、まじまじと観察しだした。

「やめてよ〜！」

未来人は起き上がろうとした。

「あ、あれ？何で首と手足がベッドに固定されているの？」

「え？知らな〜い。ちよつとアイレンちゃん？みっくんのこれは、あたしのために存在しているの。見世物じゃないんだから！」

ミントは未来人のペニスを押さえた。

その時だった

「もうだめだ〜！」

ミントの蘇生によって、回復した未来人のペニスは、必要以上に刺激されたため、尿を噴出してしまった。

「た、大変止めなきゃ！」

ミントが手で尿穴を押さえると、尿の勢いが強くなって、アイレーンの顔に当たった。

「ぎゃ〜〜〜っ！きつたね〜っ！！」

アイレーンはその場で狂ったようになって、ミントのスカートで顔を拭いた。すると、

パンツを脱いだままの彼女の秘部が見えて、熱く膨張したままの息子が尿の次に精子を噴出した。ペニスを持ったままのミントの手に、ザーメンがべっとりとした。

「あっ。」

「ちよつと、こいつのやつこそ、切り落とすべきよ!」

アイレーンは、怒鳴った。

「金太、守って!」

「何それ。」

「10回クイズ。『金太、守って』って10回言って?」

「金太、守って、金太、守って、金太、守って、……金玉持つて?」

「ピンポン!」

「ピンポンじゃないよ。」

僕はミントのペニスに付き合って、今ほど泣きたいと思ったことはなかった。脚立から落ちて、軽く頭を打って病院に運ばれただけだったのに、こんな恥ずかしい姿を見られるなんて。おまけに騒ぎを聞きつけた看護士にばっちり見られて、再び泣きそうだった。

「穴があつたら入りたい。」とか言うが、この場でミントの穴に入ったところで開き直れるものなのだろうか。

## 第25節 い、いじめる?

未来人はあたしがレイプされたことを知った。彼は特にあたしを咎めることはなかったが、この事件は少なからず、二人の間に暗い影を落とした。

あたしはもう天使学校へ復学している。そして家庭教師(女)にもびしばし教えてもらって、早く未来人のあたしに対する評価が良い方に変わっていくことを祈っている。

結婚したら一緒に住むべきなのだが、未だ別々に暮らしている。式を挙げたら一緒に住むと思うので、それまで我慢しなければならぬのかもしれない。

学校の休日と、未来人の休日は同じ日ではないので、あたしは彼に内緒で未来人の家に挨拶に行った。

「ど、どうしよう。何て言ったらいいかな。」

未来人の家の前で、立ち往生して、ドアノブを触ったり、引っ込めたりしている。

「いやくん、もう帰ろうかな。」

「帰るなよ。」

「え?」

ふと後ろを見ると、月影がいた。

「ひよえ〜っ!なんでつきーがいるの?」

「ここ俺んちなの。忘れた?」

「忘れてないよ。」

「入りなよ。待っていたよ。」

「え？」

「どうしてもっと早く来てくれなかったの？」

月影にそんなことを言われてしまい、嬉しいと思いつつも、違和感を覚えずにはいら  
れまいまま、あたしは中に通された。

部屋の中では、テーブルを囲んで、ヘリオトロープ、デスコル、エフィールが着席して  
いた。

「ミント・メリーリングです！えへ…！」

苦笑いをしながらも、挨拶はきちんとしたつもりだった。

「ミント、その場で一回回ってくれる？」

「え？」

意味も分からぬまま、その場で一回転すると、家族はお互い顔をあわせて何やら相談を  
始めた。

「ほえ？」

しかもあたしに対し、好感を持っていない様子だった。エフィールには嫌われてもしよ  
うがないが、他の二人まで同じ態度をとられてしまい、少しへこんだ。

「席についていいわよ。」

ヘリオトロープに言われ、あたしは彼女とデスコルの間に座った。

「あのく、どくかしましたか？」

「ヘリオが、お前と未来人が結婚したって言うんだが、本当か？」

デスコルが言った。

「ど、どうしてそれを？」

「読心術に決まっているじゃない。」

「そ、そっか…。」

「そっかじゃない！」

エフィールに叱られた。

「何で黙って結婚するの！」

「その前に未来人に近づいた目的は何だ！」

「ふえくっ。完全に悪者扱いだよ！」

「この馬鹿女！」

「まあそれくらいにしておいて、未来人と知り合うようになったいきさつを話してもらお  
うか。」

「さ、最初に彼に会ったのは、つききとフェアリーランドで遊ぶ約束をして、彼の家に  
行ったらつききはいなくて、約束すっぽかされたくやしきから、その場にいたみつくん



とフェアリーランドに行ったんだけど、全然楽しくなくて、『やっぱつきーの方がいいな』って思いつつ彼と別れたのよねー。で、次に会ったのはつきーの結婚式で、みっくんの隣に座ったあたしは、再び彼と話すようになったの。それからあたしが働いていた喫茶店で会ったり、一緒にメルヘンの国へ行ったり、買い物やカラオケにつきあってももらったりして彼との関係が半年ほど続いたわ。でも友達としての関係だったの。」

「それがあの旅行がきっかけで恋人同士になったわけね。」

「そうそう。だってあの旅行みんなカップルばかりなんかもん。あたしも悔しくて、みっくんとラブラブにならなきゃって思って、ラブラブするうちに彼の心臓のどきどきが伝わってきて、自分までドキドキしちゃって、もしかして、もしかする状態になっちゃったの。で、つきーの時の教訓があたしにはあるから、SEXする前にプロポーズしちゃったの。」

「お前の話を聞いてみると、大して未来人を好きじゃないみたいだな。」

そうデスコルに言われた後、4人からブーイングを受けた。

「い、いじめないで。あたしだってちゃんとみっくんのこと想っているもん！」

「どうする？」

エフィールが言うと、皆が首を横に振った。

「ねえ、あなた知っているの？人間と結婚した妖精は、人間の死後1000年は結婚してはいけないし、誰かと恋に落ちてはいけないの。」

「ほえ。そうなの？」

「知らなかったのね。」

「うん。」

デスコルのため息の音が聞こえた。

「で、でもみっくんとだったらやっていけると思う。」

「その根拠は？」

「根拠は…彼があたしを好きだから。えへっ。」

「もうあなたのことなんか好きじゃないわよ。」

「ほえ。」

「あなたが彼を裏切ったんでしょ？」

「裏切っただけじゃないもん！」

「表返ったとでも言いたいのか？」

「違うもん！」

「まあそれくらいにしておいて、未来人のどこが好きか、言ってくれるか？」

「うんとねえ。優しくして、寛大で、あたしの言うこと何でも聞いてくれて、自分に自信がなくて、『嫌』って言えなくて、等身大で、カラオケで『一夜限りの男』を歌っても怒らなくて。」

「お前、あの歌未来人の前で歌ったのか？」

月影が突然声をあげた。

「うん、いつしよにデュエットしたよ？」

「お前、気苦労の多い、純情な青年をいじめるなよ！」

「え？いじめてなんかいないよ？」

「いじているだろ！どうせ金は全部払ってもらっているんだろ？」

「え？いけないの？」

「いけないの！」

「未来人は、あなたと一緒に旅行に行くために、借金をしたらしいわよ。」

「そうなの？」

「未来人も災難よね。こんな馬鹿女に騙されて。」

エフィールが言った。

「ふえっつ。騙してなんかいないのにっつ！」

ミントはその場で泣き出した。

「うぜーな、もう！」

月影は席を立ち、エフィールも席を立った。

ミントは30分くらい泣きとおした。

## 第26節 雨上がり

「少し、落ち着いた？」

ヘリオトロープはミントの顔をのぞいて、言った。

「う、うん。」

ミントは鼻をかんだ。

「ヘリオはやさしいね。」

「ありがとう、でもそれはあなたが特別だからよ。」

「特別？」

「未来人のお嫁さんだからよ。」

「反対じゃないの？」

「半分半分よ。月影やエフィールは反対しているけど。」

「何で反対なの？あたしこんなにみっくんのこと想っているのに。」

「そうね。」

「騙してなんかいないし。ねえ、そうでしょ？」

ミントはデスコルの方を見た。

「騙されていた方が幸せな時もあるんだよ。」

「どういうこと？」

「いづれ分かる時がくるさ。」

「騙されたことがあるの？」

「昔、ミルナという女の子の人と恋に落ちて、子供が生まれたんだけど、その日の夜に彼女の守護妖精がその人と子供をフェアリーランドに連れて行ってしまったの。デスコルは今でも彼女が自分を騙していたのかが分からないの。でも彼女といた頃は、本当に幸せだったって、心から思っているのよ。」

と、ヘリオトロープが言った。

「もしかして、その時の子供がっつきーなの？」

「そうよ。」

「未来人はどうやって誕生したの？」

「話せば長くなるけど、ミルナと別れた後にカロンという人と5年ぶりに再会したデスコルは、フェアリーランドに行くために旧人類だった彼女を覚醒させたの。でもいつまでもミルナを忘れることができないデスコルに嫌気がさしたカロンは、同居していた六連とも肉体関係に陥ってしまったの。こうして生まれたのが未来人なのよ。」

「そうだったの？じゃあもしかしたら父親がスバルくんになるかもしれないかったんだ。」

「彼の母親は彼を産み落として死んだわ。そしてデスコルも途中でいなくなってしまったの。六連も一緒に住んでいた彼の娘もいなくなって、姪がまだ10歳だった彼を連れて、デスコルの弟の家庭に預けたの。そして8年近くそこでお世話になったんだけど、18歳になる前に、フェアリーランドに連れて来られたの。」

「そうだったんだ。」

「彼の人生は気苦労の連続だったと思うの。だから私はあなたに未来人を守ってもらいたいの。あなたが彼の本当に安らげる場所になるために。」

「あたしががんばる！でもレオ様は守護妖精を代わってくれなかったよ？」

「ええ、だから未来人には守護妖精が二人もついているのよ。あなたはレオニードよりもっと近くで彼を見守っていてあげて。」

「ほえー。なんかすごいっ！」

「すっかり元気になったみたいだな。」

「うん、もう元気だよ！」

それからあたしは二人と軽くお話しした後に、家を後にした。

外に出ると、月影とエフィールが寄ってきた。

「あつ、つつきー。とエフィール。」

「話をついたか？」

「うん。」

「そうか、結婚式の日取りが決まったら、教えろよ。」

「うん、ありがとう！」

「ありがとうだって？」

「結局つききーもこの結婚を応援しているんでしょ？でもってみつくんにあたしを取られるのが、ちよっと悔しかったりもするんでしょ？」

「調子に乗るな〜！」

あたしはダッシュで逃げた。

今日も何事もなく仕事を終え、中央図書館を後にした。だが、図書館の入り口のところで、誰かが僕を待ち伏せしているようだった。僕がそばまで来ると、その誰かはふわ〜つと飛んで、僕に抱きつき、ほおずりをした。

「みつくん！」

「だ、誰かと思ったら、ミントか。どうしたの？こんな時間に。」

「あのね、ミントちゃんどうしてもみつくんに会いたくて〜。だめだった？」

「だめじゃないよ。うれしいし。」

「本当？」

「本当さ。」

「うれしく！みつくん大好き！」

「僕もだよ、ミント。」

ミントは僕の体にしがみつき、涙した。

「どうしたの？」

「もう、みつくんと離れたくないよ〜。」

「じゃあずっと一緒にいようか。」

「うん。」

「君は学校があるから、君の家にお邪魔していい？」

「え？みつくんはそれでいいの？」

「うん、どうせ僕はいてもいなくても同じだし。」

「そんなことないよ！皆みつくんのこと大切に思っているよ！」

「どうしたの？急に。」

「今日みつくんの家族に挨拶に行って分かったんだ。」

「わざわざ行ったんだ。で、どうだった？」

「すごく辛口で泣いちゃった。」

「そう…。」

僕は何も言うことができなかった。

「でも、とっても温かかったよ。」

ミントはにっこり笑った。僕も思わず口元がゆるんだ。

「ごめんね。」

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness.～  
フェアリーランドに住み始めて1年経った未来人の話。

「何が？」

「いろいろと…。許してくれるよね？」

「うん。」

「ありがとう。一緒に幸せになろうね。」

彼女は右手を差し出した。

「そうだね。」

僕は彼女の手を取り、進み出した。